

標註枕草紙讀本

四



佐々木弘綱標註 版權所有

標註枕草紙讀本 下編 二冊

東京書林 弦卷藏版

標註枕草紙讀本目次

卷四

圓融院	一丁	徒然なる物	三	徒然慰さむる物	三
とり處ふき物	四	猶世おめでたき物	四	少將といひける人	六
八幡の臨時祭	七	下ゆく水	七	桃の若枝	十二
双六うつ所	十三	碁うつ所	十三	おそるべき物	十四
清しと見ゆる物	十四	きたなげある物	十四	いみじげなる物	十四
胸つぶる物	十五	うつくしき物	十五	人ばえまゐる物	十七
名恐るべき物	十七	文字ことじき物	十八	むつろげある物	十八
えせ物の所うる折	十八	苦しげなる物	十九	うらやまべき物	十九
とくゆうしき物	廿一	心もとふき物	廿二	官のつらさ	廿三



人間 <small>の</small> 四月	廿五	過たる事忘まぬ人共	廿九
昔覺えて不用ち物	三二	頼もげなき物	三二
遠くて近き物	三二	井ハ	三三
受領ハ	三三	女 <small>の</small> 一人をむ家	三三
宮づかへ人の里	三三	雪何の山より	三五
雪月花の時	三五	すびつの煙	三六
ともあきららの玉	三七	ふひまゐり	三七
心よくき物	三七	あたりかほなる物	三九
風ハ	三九	嶋ハ	四〇
浦ハ	四〇	寺ハ	四〇
文ハ	四〇	佛ハ	四九
野ハ	四九	陀羅尼ハ	五〇
あそびハ	五〇	讀經ハ	五〇

舞ハ	五〇	引物ハ	五〇	あらべハ	五〇
笛ハ	五〇	見る物ハ	五〇	夏の山里	五五
夕すゞみ	五五	五日の菖蒲	五五	たき物	五六
月あろき夜	五五	大ききよき物	五五	短くてありぬき物	五七
人の家ふつきじき物	五七	清げあるものこ童	五七	行幸	五八
わびげなる車	五六	大がさ	六〇	あをざり	六〇
ゆげひのまけ	六二	成信の中將	六二	大藏卿	六三
硯	六三	あうまう給へ	六三	文といふ物	六四
驛ハ	六四	岡ハ	六四	社ハ	六五
ふる物ハ	六八	日ハ	六八	月ハ	六九
星ハ	六九	雲ハ	六九		



圓融院ハ一條帝の
御父帝より正曆二
年二月十三日崩
し給へり御衣ハ
御一用忌の事ハ
花の衣ハ仁明帝
の帝果退て人々叙
爵るどせし時遍昭
の「皆人ハ花の衣ハ
成りぬるり昔の袂
よかわきつんせは
とよまわしをいつ
るるり」
藤三位ハ一條院の
御乳母の御後拾
遺集の詞書に見ゆ

標注枕草紙讀本卷四

圓融院

佐々木弘綱標註
百十三段

あんゆう院の御衣の年。さるく御服ぬぎさるが
して。あそしるる事。おややけうらうらめて。院
れ人も。花の衣ふるどいひらん。吾の御事さど思
ひ出るふ。雨いつうふる日。藤三位のつがねふみ
の虫のやうさるわらその。大きなる本の白きふ
こそ文をつけて。これ奉らんといひらん。いづ
こよりぞ。今日明日御物忌るれば。お志ともま
めぬぞとて。あもいたてしるあともみのつらふ

かみよハ長押の上
なごをソム
卷教ハ信景曰た
へハ大般若経一部
仁王経百卷を誦
誦したる卷教の目
録よと云を云
胡桃色ハ表ハ香色
よ裏ハ白き紙を云
こんをよの秋ハ
條院のよませ給つ
らる
稚紫の袖ハ喪服を
云ハ雲御抄よ四位
の袍也と記され
るいたるへり

りとりつきてさるんとそきるせしつら
物いみるれば見えずとてかみよついで
きつるをばとりて手あひひて其卷教とこひて
ふしをのみてあけられらるみ色といふまき
しれあつごえらるをあやと見てあけむてゆ
けむ法師のいみどけるるの手よとて
これをぶぶらみとおもふよ都よと
紫ぐんやまつるまひ志との袖
とかきたるあやさすねいりるあざな
たれがふらふうあはんに和衣は僧いのみや
と思はれどもわらふることのよまをぞぞいれる

藤大納言ハ四融院
の別當ると誰と
も考へ得ず

恐しういひたるハ
陰陽師とめい
くつしむしと
勘へ云たるをいふ

それを二ツさす
ハ推紫の袖の歌と
藤大納言の返寄と
二ツを持つて藤三位
の参内せし也

らん藤大納言ぞかの院の別當よれをせしうば
其あこまへる事なまりこれきうへのいもくま
るどふらうきこしめをせむやおもふい
心もさるれど猶おそらういひたる物を
おもてむとわんごらうてまよはとめて藤大
納言のいもに此はかしをさすねらうせ
たきはずるもら又返事あてねのせぬりらり
それをさすらうらうらうていそぎまありてか
うら事さし侍りしとらうもおそしすおそん
うて語り申ぬよを宮いとはれるくはらんじ
て藤大納言の手れいよふいあうで法師よこそ

秋わさうよ云ハ
其老法師の秋ハ秋
返ふ有しふく似
たりとて今一つ所
厨あのもよ有し
を帝の取出させ給
ひしなり。
おほされよ一平伊
せらねよとあま方
まさりよまよおほ
ゆ。
頭いよハハハハと
明らかくねて心の
おほくしくつふ
せよと云也。
鬼童ハ赤よ養虫の

ひぢれとのちよふすれバ。さうさういふれがふわ
ざふら。すきぐーあまきふ達部信綱さうと。誰うハ
あう。それよわかれよあまどねがめきゆうしが
りやふふうへ。秋わさうよ見えしみこそいいと
うく似とわれとうちくあやうせ給ひて今一つ
ぢぢばしのもとさうけるをさう出させぬれ
ばいであま心うふれおがされよあまかいらい
くや。いうでまき。侍らん。とこせあふせあ申し
て恨みきこえて。笑ひぬあふ。やうくおかせま
出て。おつくひふいきたりうらおふ童ハ。だいと
ん所のとじといふもの。ともるりうらをふ兵

やうらると有し首
尾なり。美陸ハ養虫
を鬼の子といふ詠
有し故也といへり。
引ゆるかしハ引動
かし也。治官のつこ
さう。顔よお給ひし
をまて。藤三位のか
こちすあせうら
さまなり。
かこりうよハ月慢
さうよのまよ。帝
の神乳母なれい也。
文取いれハ。彼使
の重ハ是さうしか
と。廿文受取し藤三
位の女房よ見とれ
ハさう。

漸がわらひ出したるよ。やありけんさうおほ
せらるれバ。宮もわらせぬあを。ひきゆうの
奉りてさうかくはの。せあさ。程うこの
ひもさう。手をうち洗ひて休をぐみ侍りし事よ
と笑ひね。さうらみぬ。さまもいと。かこりか
ふあ。いぎやうづきてをの。さてうへの。ごい
ん所も。笑ひの。しりて。つがねおなりて。秋
ら。いたづね出て。文とりいけ。人ふ見をれバ。そ
れふこそ侍るぬれといふ。誰が文を。ふれらとら
せしぞといへ。バ。あまき。さうち。忍みて。ともかく
もい。さう。まふら。藤大納言。後。お聞て。笑ひ

三

興下 寝ひたり。

はれくさるもの 百十四段

つれくハ静まこ
ひく退居ちりき
りふ。
所よりくハ深く
つくハ時家をさ
り外より物忌を
を云。
うまおりぬハぬ六
又思ふ目のおりぬ
を云へり。

ところさりたる物いみ。うまおりぬすぐらく。
除目よつかさえぬ人の家雨うちふりたるハ
ましてつれぐさる。

つれぐさるさむる物 百十五段

物忌をれハ物忌
よつしみあ外
よりきたる人さ
ハいれぬわされど。

物がうり。暮もぐらく。三つよつをのりなる
ちごのむねをわうつふ。又いとちひさき見
の物語したるの。急みるどしたる。くら物。男
子おさるがひ物よくいふがきたるハ物忌をれど
いれつあし。

とりどころなきもの 百十六段

興ある人されハ
くさる。
みそひめハ御衣箱
様なり。衣よひめの
りして張ハハこハ
ムせん為るハぬ
れてハより所まの
まべし。
あとび。薄信云。跡火
のまよく表を送り
出したる跡よた
く故されハまべ
し。

かさちふぐげよ心あきき人。みそひめのぬま
たふ。これいみどうわろき事いひさる。よろづ
の人ふくむる事とていよとむむきよもあ
らず。又あとびれ火とて事なると。せふ
あき事まねハ皆人さるハんげふかきいで
人の見るべき事ハいあねど。此さうしを見る
べき物と思ふ。さうしハあねまき事をもふく
きをも。只思ふん事の限を。んとして有し也。
さほまふめでさき物 百十七段
まんの祭乃たまハハあり乃事ハ何ごとふの

試樂ハ臨時祭の音
樂をすつ試る心よ
て祭の前一兩日よ
行もす由雲國柳
よみゆ
掃神寮ハ取原抄よ
掌鋪設事云々と見
ゆ

信長ハ地下の樂人
なり
やうかひ瀆臣云和
名抄よ錦貝をよめ
りこくハ貝多て作
れる盃なりへしざ
れハ女を出て取け
るとハ盃をとる也
又下よ打こほしと
あまハ酒をこほさ
を云へる也

何ん試樂もいとをうし春の空のけしきのだ
うふてうらうらとあふ清涼殿の御前の庭ふ
かもうばうとれうみどもとあきてはくひを
北に行くと舞人の御前よりふごうくひひお
事よあえん所の衆どもはいがさねどもとりて
まへごうとふとあわうべいぶうも其日ハ御前
ふ出入りぞうく公卿殿上人ハかひあく盃と
りてぞうふとあわうかひといふ物をのこるどの
せんごううとてあをを御前小女ぞ出てとりけ
る思ひうけど人やあうんともあらぬふびうき
屋よりうう出て多くとらんとさわぐものの中

れられて一本お
れぬとあり
をこわ殿ハ宜陽殿
あり

承香殿の云々樂人
舞人殿殿の前より
昇竹の臺を経て清
涼殿の前よ出る
まをへへと也
うと瀆ハ駿河舞の
うたひ物の名也

々うちこぼしてあつうふ福よろらうふふと
とり出ぬうものふハたかれてかくこきをさめ
どのふ火焼屋をたとりいろくこそをうけ
れかんもうづこのむねどもたみとらやお
そきとどのもうづこの官人ども手ごとふと
はきとりするごうらす承香殿の前のわどふ笛
をふきうてびやうしうちてあそぶをどく出こ
ちんとあつううどをまううひて竹のませれも
とにわゆみ出てみ琴うちたるわどなどいりふ
せんとぞねがゆるや一の舞のいとらるる
袖をあてせて二人より出て西よむらひてまぬ

半臂の緒云々ハ陪
従のこよるり。
あやゆるまき扱お聲
のあやのかき也と
みえ備はハあやも
なまこま山とつふ
歌曲の名まうし
といへり。

所琴界返して以下
ハ退出のさするる
し。

いでハ俗又イヤハ
ヤモウとつふよひ

つぎく出るよわーぶみをひやうしあわいせ
てハらんひの緒つくろひううぶりきぬのくび
あどはくろひてあやもるまこま山まどうこひ
てまひこちふるいさづいていみじくめでこた
不ひれるまよふハ目一日見るともあくまどき
をまてぬるこそいと口をしくれどまこあまづ
しと思ふハこのもきみことうきかつして
此くびやぐて竹のうろろくすひ出てぬぎこ
れつるまよどもものまめくささいみどくこ
そちまういねりの下がさねるまみどくれあひて
こるさうるとおわたるまどくこさういで更ふい

くき詞をり。

加茂臨時祭ハ宇多
帝の寛平年中は始
まりて十一月下画
日を行へり。

寒くくえ氷りてハ
霜月の事なれハ也
うらたろきねハ見
る人の衣裳より
オの男ともめして
ハ舞つき時刻まな
れて人長坐をたち
てオの男ともをら

ハバよのはね也此くびハ又もあるまどくれバ
おやいみどくこそまてふん華ハ口をくたれ上
達部まどもはづきて出ぬひぬれバいとさうぐ
あう口をくきよ賀茂のまんの祭ハかつりど
ちれ御うぐらるまどふこそまづさめらるれ庭火
のけぶりの細うのりりるまかぐらの笛のお
しーろろわなまき細う吹まきこるま哥の聲
もいとあをれふいみどくおまろくさむくさ
之氷りてうちこるまぬもいとつめさう扇もこ
る手れひゆるまおがえむオのをのこどもめし
てとびきこるま人長の心よげさるまどこそいみ

て舞たりひろをさう
里方も時ハ清サの
いまも宮つかへせ
さうし時を云
ちかわさるさハ里
人ハ清サの依り
ハ見る事うれハね
ハ使舞人とのハ
路をわさうゆき
見て猶あかとして
賀茂すて行てみる
とさう
けーの板ハ賀茂の
橋をさう

少将と云々上りつ
きよて舞人よ出
し人のなごさうし
事をいへるさう

じくハ里さうるときいたるわさうを見るみあ
ねを御やしろまで行て見る折もありさきさう
本のもとお車さうたれば松の煙さあびきて火
けのげふそんひの緒きぬのはやもびさうりハ
こふるくささうりて見ゆれさの板をささうら
しつゝ声あはせてさふんどもいとささうしきさ
水のささう音笛のささうどのわひさうハさ
とお神さうれさとおさうれささうんさうし

少将といひける人 百十八段

少将といひける人の年ごとおまひ人さうてめで
たきおれお思ひ志みさうさうさうさうりてさの御

かみの清やしろハ
上賀茂の御社を云

八幡臨時祭ハ朱雀
院の御時より始ま
れり

さうハハかへりま
のあさるさう
うハハ一乗院を申
をささうら

やしろの一乃橋れもとおあさうささうけハゆ
さうせちお物おもひいさうとにさうんど猶此れ
でたき事をこそ更おえおれいさうさうさうれ

八幡の臨時祭 百十九段

やしろのまんだのさうりの名残こそいとはれ
づさるれさうどてさうりて又さうあさうをせざり
らんさうらバをさうしかさうさうらさうをさうり
よりさうづるこそ口をさうさうれさうさうさう
の御さうふきさうりて明日かへりさうんれ
してさうせさうさうおせさうさうまさうとさうさ
ぶさうららんさうらバいうさうりてさうさうさうさう

こころをいふは
とけぬとていふ
らう事よりの
あやし。
あやしはつや
あやれどつ
らくつあといふ
こころなり。

ろくろはに身殿の
邊と似て身とん
たれどこいた
屋根のふき廊下を
云

どつこれいふどりて侍らむいせてこそとい
ひつれば露おうせて清らんぜんとしてとら
ふと宰相の君のきりていつへつるなりをう
しこそおかせつるの家清里居いとけうけ
る所よをすひせさせぬらんぞといひきき事
あまとも必さあふべき物ふおどめさん
つひもさるるぞあやといひつるうりき
せ奉れとあめりうしすありて見給へおはれ
ある所のさまうなるこの前ふう急られ
けるびうんのうらめきをさうき事さどのた
まふいさ人のふくしと思ひつらうしうばみ

おつくりは老ら
らう事よれ
あやのまうれど
いわやうさ
あやう。

たぐぬたるは遠
長いなり。
人あるまぢまけ
送長公の人ふ縁
あやう。清めを
する者のさま

宮のへんは店室の
あやうよはあやう。

ささめい下つう
の女なり。

う侍りしうばといつらうきこゆおいらうあ
とて笑ひぬあげいこのまらんと思ひまめ
る御々きみもあやうさうふんたらのたの
大殿のうこれ人あるすぢよてありなごさめ
さうつどひてりのさういふあさよりま
うを見ていひやみさあうてさうまみ見
さうすあうらねばすあまさうあさうびの
さも過してげみえさうあうらるる宮のへん
みいたがあれさうさあうてさうさうさ
くべいさうさうす御言さうさうてさうさ
あれバ心がさうてうらさうさうさうさ

くもてくまのた
言ハ侍人の若とわ
がして法がへのは
文を思むせのへる
は。長女はあのかた
りても思ふとより。

心吹のねびらハ心
吹ハ心すき色され
バいとどあやとい
ふまなり。

まぐちの孫ハ法少
が望居の御消息を
見て感涙とこがす
と云。古今集みきの
中のうきもつてま
ま告げるくみまが
あつものハ。河うり
うんとあつとせん

文とめてそくう。ねまふんより。た京の君とてあ
びてぬをせたりつるこしひて。こよみて。うんひ
そまのぶとあまうりあり。くばてのむか。せ。筆よ。て
あ。ぬ。る。ち。り。と。じ。ね。つ。ぶ。ま。て。あ。け。し。れ。紙。お
いのもうせぬさず。心吹の花びくと。只一つ色
ませぬへり。それよ。い。と。ど。お。ゆ。ぞ。と。う。せ。ぬ。人
る。と。見。こ。も。い。み。ド。う。回。ご。ら。の。た。え。ま。よ。ひ。る。げ
くれつる。心。を。感。て。う。わ。い。さ。ふ。ま。づ。あ。る。こ。ま
と。と。と。も。あ。ま。う。ち。ま。よ。お。て。は。お。ま。い。つ。の。お。の。と
り。ご。と。ふ。お。が。い。出。聞。え。と。せ。ぬ。よ。ま。る。物。と。と。て
た。ま。も。あ。わ。い。ま。は。ぶ。う。お。と。の。み。こ。を。侍。る。め。れ。

ち也。抄よ。ま。え。ん。知
く。ら。ま。ま。と。あ。る。ハ
誤。り。り。
いうまハ。い。う。た。り
り。か。の。あ。也。
歌。の。ま。く。い。い。ま。が
思。ふ。と。い。い。か。哥。の。上
句。を。い。ふ。

る。ど。て。か。く。ま。い。ハ
情。少。の。心。ま。り。
これ。ハ。ハ。か。く。る。如
子。童。ま。の。意。也。

る。ど。う。ま。あ。い。せ。た。ま。す。ぬ。る。ど。い。ひ。て。こ。ま。る
所。よ。あ。う。う。と。は。お。ま。う。り。て。ま。あ。い。ん。と。い。ひ。て
い。ぬ。る。の。ら。ふ。は。お。筆。お。て。ま。あ。い。せん。と。す。る
お。此。哥。の。ま。と。は。ら。よ。あ。ま。ね。たり。いと。あ。や。た
る。ど。あ。い。い。い。ひ。る。が。い。ぬ。人。や。い。あ。る。
こ。こ。と。に。ね。が。え。る。が。い。い。ひ。お。し。れ。ぬ。ハ。い。う
お。ぞ。や。う。ど。い。か。を。聞。て。ち。ひ。い。わ。う。た。の。お
あ。ぬ。い。ら。が。下。ゆ。く。お。の。と。こ。を。せ。と。い。ひ。し。る。
あ。ど。て。う。く。ま。れ。つ。ま。う。ん。た。れ。よ。と。い。う。ら。ま
ま。ま。う。い。は。う。り。ま。あ。い。せ。て。ま。ま。う。い。か。ど。い。て
ま。あ。り。たり。い。う。と。例。よ。り。い。つ。ま。う。う。て。は。

けりてこれハ遊仙
密に半面をよみて
半隠れたるをいふ
小町家集ふをいふ
ささねこれ髪を
見せしとやと隠
れらんがこのあさ
うほどあり。

ささね合の左方
右方よわくれて遊
ととて秋合のや
うは勝負を争ふ
さ也。
かたくさよハあ
でハさぞよおろ
うね云。

几帳よとらわれるとあれい今まありうれ
どわつたせぬひてあつたまをれば折らる
いひつづりたりとるんぬあつたつげても
ばとてさ感じまふねあつたのいよハせてか
かりたるはちとてさふよとてくれこ
ととさふけりたればいみじわつたせぬひて
さる事ぞあまうりあつたつげるとははもあ
りぬづとまど作せられてはじでふ人のさぞく
あつたさつらふよとてさよハあつたさつら
の事いさつらつらさつらさつらさつらさつら
いとんさつらつらさつらさつらさつらさつら

たのむうハ竹糸
して頼みよハ
しむらと云。
さ申してハがやう
よ申とてよハの
えらう。
田りて遠くハまど
合の暮日の遠つと
たると云。

ささねハ左右の
々の人の居分れ
たると云。
あつたハ右のこま
たハ左方あり。

ろさ事ハいひ出ととさつらさつらさつら
うんいうよさつらとととととととととととと
さ申していととととととととととととととと
やれハうら目いとととととととととととととと
たまひびととととととととととととととととと
といととととととととととととととととととと
まばおがつたれと思ひるうととととととととと
みさか人の男女あつたけて殿う人さつらよさつ
くかやと居るみてあつたとととととととととと
みどろ用意とととととととととととととととと
みをさつら言ふんとととととととととととととと

枕草紙卷四

心せしれしとぞ
つよきさうては
るぞの初とて
面をきほつる
身ありハ此の
心ありハ此の
とまやす事
バわづりとい
さるくハこれ
とさう
教させハ勝の教

わさしつては
心せしる
たの方の人
のうの人の
ていとい
こいとい
まのほろ
らいて
ふまう
やま
こすま

させとさう
直徳合
出たる
いとあ
右方の
いみ
右方の
いひ
つ細也
これハ
ハ清少
たらハ
知り
らず
と家
れる
半とさ

どてりま
とびく
半さ
之あ
る事
かみ
地
どわ
さ

枕の若枝 百廿一段

正月十日空いとらう雲もあつらう

枕草紙卷四

かこもハ相ひを云
涼氏帝夏の表ふこ
このさまよいとよ
くはらりきみえこ
り。

さハハみドウ云
さやうふ赤さいと
あしれとつり
のらひたりとよ
さ同うなん物と
なり。

はみ短かりれとま
き人と任ひくま
との基うつさまと
いとくうつと

て猶ありぬふやみドウきとさうさといふ火をあり
くかきぞてかききれさいをこひせめてとみよ
さいさねぞとらうとぞんぬのうへみとさまら
かりそねのらひの顔ふつれぞのこまきてに
しつれていとこいからぬあがうとさありやりて
さハハみドウのろふとまらうとさうとらんと
心むとさげふうちやもりたるこころいざらうの
ふんゆれ。

基うつふ 百廿三段

ひもハ直衣の入紐
らう。
袖の下云ふ及びこ
しふ石をぬけバ盤
の上は我袖のさそ
らぬやうふ心する
さまなり。

つらみみのこのと和
名抄ふ椽標實也と
みゆどんぐりの登
の類するべし。

さなすりハ和名抄
か全梳とみゆ
水を物ふ云ふすき
とさるものよれ
し影を云。

まくのあぢさすひもかこまらうらうらうきに基
盤よりいとらうとほくてたよびつ袖のあ
今うと手よと引やりつらうとらうとさ
おそらうまもの 百廿四段
ほらむみのうと。 やけらる所。 氷ぶさ。 ひい。
髪多かるとのこれ頭あしひておさかど。 栗
のいざ。
清いやんゆ物 百廿五段
かろけ。 あしきかまらう。 しつみふさ
とこも。 氷と物ふいさすさうげ。 けらし
ま細びつ。

手ぬそく洗ふ内則
よ凡内外鶏初鳴成
盥漱衣服欵枕簟履
掃室堂及庭布席各
従其事とみゆ

ねり色のきぬとハ
陳賈の衣ハ白きつ
やあり故やしのよ
ふんやみゆれハ
珠更きとまけまり
といへる也
式部丞の衣やく砂
み爵とみゆれと廣
臣ハまやくハ笏ま
りべハ此段をて
器物の類をいれ
ハ叙爵の義いり

きこるげらる物 百廿六段

ねぢみのをみる。 ほとりて手おそく何ふ人。
白きけををる。 すゞれありくらご。 油
いろもの。 すゞりの子。 あつさかどふひと
くゆあみね。 まぬのあえら。 いづれもく
まこるげらる中ふねり色のきぬこそまこ
るがなれ。

いやけらる物 百廿七段

あまのぞうのまやく。 黒まかこのまぢらふと
る。 布びやうぶのけらるまふりくらみくら
い。 いろいりまねて。 中々何とも見えす。

あまのぞうとてつか
さえとめらる六
位笏ハ職の述曹司
けたつみの隅の築
地の板をせしを云
々とあまて思ふ
べしとてり

出雲造とてか
の土産なる由民部
式よみゆ

え結らるハきれん
事をぬづらふ致る
るべし。
親らどの云ふ子の
心よハもと胸つ
ふら事らるべし。

あまのぞうとてつか。 櫻の花おかくさうせて。 胡
粉朱砂るどいろどりくら繪うらる。 やり戸
づ。 何もあふらるのそいやさあり。 ひら
らりの車にたそひ。 けびみのの袴。 いろすの
とぢらとる。 人のみかうらふれふとりとる。
まここのいづもいしらのたきみ。

ひねはげらる物 百廿八段

ろくへ馬見る。 もとゆひよる。 あらうどの心
地あいらとて例るらぬくらるるまして世の
中らど何とぐらる比よらづの半ゆえむ。 又
物いろぬらとれらる入て乳ものますいしとく

いちぢかかぬい
誰とせあぬくの
声うそ判然とわり
らぬ也。
ことわりハ胸のら
ぶうも道理とま
り。
甚うなるもつみよ
ハ我身の上をぐげ
ぐととりし事こ
けさめ文ハ後抄の
文を云。
うつくしきハ多く
ハ愛らきをいふ
言ふ用ひ又美靡の
くちらよむめぐみ
あまれむえも用
ひたり。
ありふ美隆云瓜ハ

わのとれいづくもやまぐて久しうなるいふ。
れいの所るどふてことよすまぐいちらるううぬ
人の声きつつけくるいことこり人さぐの甚う
つあどつみふまづぶこそはぶるれいづくくく
き人のきこらむいづくくこそあれよづきこ
る人のけされまのゆききく人さくはぶる。
ゆき人のふみとりてさし出くるも又つぶる。
うはくしきもの 百廿九段
ありふかきくちちごり顔。雀の子のねずるま
するふさどりくもまづぶふまどつきてすま
はばおやすぐりの忠るどむてまてくむまを

和名抄ふ利とわ
りて古歌も多く
みえた。皆うり
わうてこくよふり
とみえ又ス後送長
公傳もふりてを
ハ器物を設けよ
とありハ心得く
一全う誤まりし
るうへ云云。さん
と妙頃の俗話さう
しも知るへうす
終よく考ふべき事
なり。
尾よそぎころ。傳氏
るどふ。小児の髪
短くてもあまをさ
とつり。
袴がけふ云。是十
児のさまるべし
美隆ハ宇都保物語
の載ひらき。團ゆら

いとらうし。さくをのりるちちごのいそぎ
てとひくるらふいとちひさき塵ちぢのちく
とぢごとみ見つきていとさうげなるねまひ
おとつてねとまなごふんせらる。いとらうはく
し。あまはそぎくる児の目み髪のはひさる
とがさいやらでぐらうらぶさておるぢらるい
とらうら。しすきぎけあゆひくる腰のうみ
れ白うさうげなるもえらるあうつら。おや
さふああらぬ敵くわくものさうぞきこてられ
てありくさうつら。さうらげなるちちごのあ
うらほふいづてうつらむちどふういは

引はられ一本引い
られとある然るべ
き御書言ふツララ
ハルといふ河あま
と此頃さいふ河の
なかるべし。
親のきたるの下に
文字をいきて心得
べし。
まさかとはらり
其子の引さかすを
親のまさなるとば
かりひみて其物を
取もかくさぬと云

はやちハ風の名不
て和名抄は暴風を

思せよや母など引あるがまふおとなごと物い
ふとしてふともまきいれねばをづら引さぐ
いで思るこそいとふくけきそれをまさなと
むりうちいひてとりかくさでけかせそそこ
なふあとなり急きていとおやもふくしおれ
えをたなくもいそでみるこそころもとあ
られ。
名れそろしき物 百三十一段
あをぶち 谷のやら たいさ くらぐね
つちくれ いろづちハ名のみあらばいとど
れそろし ちやち ぶちうぐも 不こぞし

ふめり。
ふさうぐもハ不祥
雲なるべし。
不こぼし一本産屋
とあり。
牛ハ佐目一本うし
かさめとありかさ
めハ擁劍といひて
蟹ふ似たるもの也
いすし一本いり
りとあり
がうさうハ強盜也
うおおハ牛頭馬
頭の類なり。

いちご覆盆子とか
くまことハ文字
ハくらくしくこそ
水ふきハ若實とか
けり。

おろみ うーハさめ らう ろうのをさ
いすしそれも名のみあらば思るもおそろし
なをむしろ がうさう又よろづふれそろし
ひぢかさ雨 くちなすいちご いぎまごま
おふどころ おふわらび うばら からさ
ち い里すみ ぶうたん うーおふ
見るふことなることあき物ハ文字ふかき
てこもくしきもの 百三十二段
いちご つゆ草 各ぶま くるみ もんぢや
うそりせ 皇后宮の檀大夫 やまもろ いさ
どりハマして虎の杖とかきたるとうつ急あ

むつかしげハムサ
クロレイ。メンドウ
ナワツラハレイイ
ヤニ思フなどの意
なり。

いと深くしもハ男
のあまり深くハ思
ハぬ女なり。

えせ物の云々常ハ
あなつらはしき物

ともつりぬべき顔つきを。

むつろしげなる物 百三十三段

ぬひものうら。猫のみこのうち。嵐のいま
だ毛もおひぬをすのうちよりあまのまろをし
出たる。うらまごつりぬかまぎぬれぬひめ。
ことふきよげならぬ所のくらま。ことなるる
なまき人のちひはまき子どもなどあまのもちてあ
つりひさる。いとふううしも心ざしふき女の
心地のう志て久志くなやまたるも男の心の
中ハむつろしげなるをし。

えせものうらなるもの 百卅四段

の折ふふれてハ時
ふあふきいふ。
正月の大根ハ齒が
ためなどみ用ふれ
バなり。
僧の文一本僧の名
とあり。

春日祭ハ二月上の
申の日なり。まづ未
の日勅使たつ近衛
の中將少將これをつ
つむ清和天皇の
貞觀元年ふはじま
れり。
菓子ハ幼なき童女
まてまづ湯茶をな
め。次ふきこめす
ならはしなり。
みくじあげハ五節
の養姫ふつく女房
と云。

正月のおふね。行幸北朽のひめまうちぎみ。

六月十二月のつごもりをりの蔵人。季の

御讀經の威儀師あうげさきて僧の文どもよみ
あげたる。やとらうくし。伊どきやう。佛名など

のあさうぞくの所れ志う。春日祭のとおりど

も。大饗のところのあゆえ。正月のくまりこ

うづ急のやうし。五せちれ心見のみぐしあ

げ。節會の志をいせんのうねめ。大饗の日の

史生。七月のすまひ。雨ふる目れいちめ益。

わよりするをりのかんどり。

くるしげなる物。 百三十五段

枕草子 卷第四

御陪膳ハ天皇の御給仕をつかうまつるをいふ。

さしもなきハ、驗のみえぬをいふ。人知らされみあらしハ人み笑されぬやうふとの意也。一の所ハ、攝関の人をいふ。まゝ一の人といふなり。時めく人ハ、攝家なとみ近習まで召つらるるをいふ。えやすくハあらねといくるべきものなまとの意也。心いらせしハ、短気みてせちくしきを

歎かきといふ物するちごのめのと。思ふ人ふたりとちて。こたさうたさふ恨ふすべらとたるをとて。志をき物のけあづりたるけんおやげんぶふをやくたよりるべきをさしもなきと。さすぐみ人わらされみあらとねんむる。いとくるしげなり。わりなく物うさぐひする男みいそどう思ひきたる女。一の所ハ時めく人もえやすくハあらねど。それハよりめり。こゝろいらせしたる人。うらやましきもの。百三十六段。経など習ひて。いみづくたどくくして志をがち

いふ。法師ハことよりハよくよむハ理りていふも更なるの意なり。

稲荷み思ひおこしてハ、稲荷詣を思ひ立ちての意也。中の侍社ハ、延喜式社名帳ハ、稲荷神社三座下社大山祇申社倉稲魂上社土祖神とあるこれなり。二月午の日云くハ、清少納言初午稲荷まうてしたるをいふのみあり。

よて。かへすくおなごし所をよむハ法師ハことこり。男も女もくるくるとやすらりよよみたることをあれがやうみ。いつのおとこそふとお不ゆれ。心地など軽ひてあしたるふうち笑ひ物いひ思ふみなげめて阿ゆみありく人こそ。いとくうらやましけき。稲荷み思ひおこして参りたる。中の侍社のあど。わりなく苦しきをねんとてのがるあどみ。いさゝくくるしげもなく。おくれと。思えたる者どものよさ。ゆきふはきだちてまうづる。いとうらやまし。二月うまの日の曉みいそぎしうど。坂のなりらむらりあゆみしりバ。

枕草子 卷第四

かゝらぬ人も云く
ハ、うくわびしうら
ざる人も世ふあら
んをとの意也。
つがさうそく云く
ハ、よき人ふハあら
ぬさまをいふ。
引たこえハ引あけ
たる也。
まろの云くハ、彼女
の詞也。
七度指ハ、一日ふ七
度まうつる也。いな
りハ七度指つるま
信心おてなり。
かれう身まら彼女
をいふ。我ありきり
ぬる時なれハたる
べし。

この時をうりみなりみなり。やうく暑くさへな
りて。まことにわびしうかゝらぬ人。世ふあら
んものを何志よまうでつらんとまで。涙おちて
やまむふ。三十あまりをうりなる女の。つがさう
そくなどふハあらで。さ引たこえたるがまろ
た七度まうで志侍るぞ。云度ハ詣でぬ。四度ハこ
とあもあらず。ひつとみも下向志ぬべしと。乃よ
あひさる人ふ。うちいひてくごりゆきしこそ。只
なる所よてハ。めもとまるまじき子の。かれが身
ふたご。今ならをやとおおえしう。男も女も。法
師も。よき子もちたる人。いとどううらやまし。

ざがりむハ、下りた
る髪のかまをいふ。

よき人の侍あふ云
云ハ、是よう彼まよ
くかく人の羨しき
子をいふなり。
香の跡たこのやう
ふハ、子の香下ふあ
しきをいふ。

さやうの事ハ、心ふ
くき所への仰せ書
の字をいふ。
難波まごりの云く
ハ、手跡の未熟なる
をいふ。俗ふれをた

髪長くうるをしう。はがりむなどめでよき人。
やんごとなき人の。人ふか。いづりき給ふも。いと
うらやまし。手よくりき。歌よくりみて。物のお
よもま。いどり出らる。人ふ。よき人の侍あふ。女房
いとあまたさぶらふよ。心あぐき。所へつりハ。す
べきおるせがきなどを。誰も香の跡などのやう
ふえ。たごりハ。あらん。さ。ま。ご。と。志。も。た。ご。と。ふ。何。る。を
わざとめし。て。硯。お。ろ。し。て。か。せ。させ給ふう
らやまし。さやうの事ハ。おのおとを。あ。ど。ふ。成。ぬ
ま。ま。ま。こと。ふ。あ。ふ。を。わ。た。り。の。と。ほ。う。ら。ぬ。も。り
ふ。あ。ご。が。ひ。て。かく。を。ら。れ。ハ。さい。何。ら。で。上。達。部

れせぬといふ類也。これハさハあらてハ下手なるふり、まゝ折ならての意也。上達部のもと云々。なとふハ、やうの方へ遣すべき由文よその意也。あつまりて云々ハ、彼よりき人を人くあつまりて、ねさきみちを戯しいひて羨むとの意也。三味堂ハ、法華三味念佛三味など、て他よりなく、其のうけけ行ふ堂と三味堂といふ也。かこきのさいま、たるハ、相手のさいのふく出るさいま、

のもと。又とドめてまゐらんなど申さする人のむせめなどふハ、心ことふうへをりをむめてつくるハ、せ給へるを、あつまりてたをふせふねさがりいふめり。琴笛習ふふさこそハ、まごさきあどハ、うもごやうふいけり、うとお不ゆめさ、うち東宮の詰めのと。うへの女房の南うづぐゆるさむたたる。三味堂さて、ふひ曉よいのられたる人。すぐろくうつふかこきのさいま、たる。 御り世を思ひ捨たるひと里。 とくゆうきもの 百二十七段 まきぞめむらごく、里物たを條たる。 人の子

とくゆうきハ、早く見まほしきかまわさきをいふ。く、り物ハ、枯物ふて、く、り漆といへる物たるべし。ぢもくのまごつとめてハ、縣呂除目の翌日早天をいふ。さて知人の必受領すべき年ハ、何れの國守と、く、関りまほしとの意也。とみの物ぬひハ、急の裁縫より、近き暗いざみきるべき料の物を縫はせたる時をいふ。居いりつ、あがこを云々ハ、物見の所へ入居て来る方を見つめて居

うとたる。男をんあとくきりまわし、よき人ハさならなり。えせ物げものまをだよきりまわし。ぢもくのまごつとめて、必ある人のたるべきおもきろまわし。 おもふ人のおこせとる文。 こゝろもとなき物 百三十八段 人のもとふとみの物ぬひよりやりて待やど。物思ふ急ぎ出で、今やくとくる、う居いりつ。あなごをまもらへたる心地。 子うむべき人の、ど過るまで居る、うきものなき。 遠きふより、ふ人の文をえそ、うたぐふん、たるそくひなど、をふちあくる心もとなし。 もの思ふ急ぎ出で。

初巻 終巻 四

る心地んちかくふし
との意也。
ふんトたるハ封し
たる也。
そくひハ積飯あや
糊付て封したるを
りふ。
白き管ハ警固の白
杖は持て来るをい
ふ濱屋云たハ警固
の管ハあらて祭
すたるよとより
使の廳なとへ引行
く罪人とひき来れ
る警固の管也祭の
警固ハあらすさ
れハやりよする
いひたるも罪人と
つふなるぞし。
まへなる人ハ教へ
物いせざるハ我
ハ隠居居て前の人

りなりふなり。白き志もとなど又付たるふちう
くやりよする不ど。わび志うおりてもいぬべき
心ちこそすま。志られどとるふ人のあるふま
へなる人ハ教へて物いせざる。いつうと
まち出たるちごの。いうも、かなどの程ふたり
たる。好来いと心もとなし。とみの物ぬふふく
らきお。そりふ系つくるはれどわれをさる物ふ
て。ありぬべきおをとらへて。人よつけさす。ふ
そまもいそげハふやあらん。とみふもえさし。い
れぬを。いで只なまげそといへど。さまがふなど
てうハと必ひがふえさらぬハ。ふくさはへそ

ふ我此ふあらぬ由
を教ていせせたる
の意。又我ハかくれ
居て前なる人ハ物
いせせてき。ふた
る心地心もとなし
と両説あり。
いらも。うハ。五十
日百日也。
ありぬべきおをと
らへてハ。我ハ系付
くへき針を握居て
人ふつけさするな
るし。
只今おこせんとそ
ハ。其うりし車を追
付返さんとして乗出
しとの意也。
さなりけるとい。我
車のかへるなりと
喜ふとの意也。
事ハなりぬらんハ。

ひぬ。何事あもあま。いそぎておへゆくをりま
づ。こがはるべきおへゆくとして。只今おこせんと
て出ぬる車まつらど。こそばもとなられ。大路い
きけるを。はなりける。とよろこびされ。おがま
ふいぬるいと口を。まして物又よいでんとそ
あるふ。りハなりぬらんなどいふを。きくこそ。俺
し。たれ。ほうとける。人の乃ちれ。こと久しき。
物又ふや。又清ちまうで。あどふ。もろともにある
べき人を。のせふ。いきたるを。車さし。よせたてる
が。とみあもの。らで。ま。とする。いと心もとあく。
うちすて。もいぬべき心地する。とみふ。いり

枕巻 終巻 四

祭のしる時刻ふ
なりぬらんとの意
也。
後のまの、後産あて
えなのとこほる
をいふ。
いりすみの前炭也。
けさう人などい云
云ハ、態々物思てせ
て、擇くすべし、ま
さやうふいそくま
しけまこと、又自然い
そくべき折もあり
との意也。
ときのみこそいと
云々ハ、口疾きのこ
こそハ、規模ならめ
と思ひて急きよみ
出れハ、僻りも出来
るとの意也。
まつくろめハ、松
葉黒待、齒黒、雨説也。

ずみおこま、いとひさし。人の影のかへしとく
まべきをえよみえぬぞ、いと心もとあしけさ
う人などハ、さしもいそぐまじけれど、托のづか
ら又はるべき折もあり、又まして女と男もたど
みいひうのまをどハ、ときのみこそいとあふ
どよ、あいなくひぐるも出くるぞうし。又こ
ちあしく物ねそるしきなど、夜の明るまつこそ
いそ、どう心もとならぬ。まつくろめのひるや
ども心もとなし。
官のつかさ 百三十九段
故殿の清ぶくのころ、ま自世日此清をらへとい

季鷹云、まつの二字
行上の行の明る
まつのまつ、語て
みハ、いれるなるを
し、さて、齒黒のひる
をまつると也。
濱長云、是又よくも
あさらず、今思ふハ
上文のいひつけ
たる例を考れば、ま
つハ、まを、書ひう
めたる也、又の意ふ
てよきこと也。
故殿ハ、中関向殿也。
出させ給ふを、まハ、
中宮定子の出給ふ
べきをの意也。
官のつらさのあい
たる所ハ、太政官廳
也、一本あいたん所
とあり、朝所なるを
し。

ふりに出させあまべきを、志きの清さうしハ、方
あしとて、官のつらさ、れあいたるふよ、まらせ
あつり、まを、いさばりあつくり、わりのなきやみふ
て、何事もせばう、瓦ぶきあて、さまことなり、れい
のやう、み格子などもなく、只めぐりて、みま、ばう
りをぞうけたる、中々めづらしうをうし、女房庭
みおりのなど、して、あそぶ、前裁みハ、くハ、んざうと
いハ、草を、ませゆひて、いと、おろく、植たりける、花
きハ、やりふか、さなりて、咲さる、うづく、志き、おの
せんざい、いよハ、し、時づら、さなど、ハ、ま、か、ハ
らまで、かねの音も、れいよハ、似む、まきこ、ゆるを。

柳 卷 四

くじんさうハ菅草也。うつくしき所ハ歴々たる野ハ似合しとの意也。時つらさハ漏刺博士をり也。うまひの云ハ薄鈍の喪服也。

招あけられたる人々ハ若くとも上臈をうろくしく登らぬさま也。過したる人ハ羊たけ上臈なる人をいふ。上達部のつき給ひしハ公卿の着座し

ゆうーがりてわりきん々二十餘人をうり。そかたよゆきてをしりたりきやみのがりたるをこれより見あぐればうまひびの裳からきぬおなじ色のひととぐさねぬの袴どもをきてのがり立するハいと天人などこそえいよまじけむど空より相りするよとぞおゆるおなじわうさあむどおあけられたる人ハえまどらでうらやまーげふえあげたるもをうー日暮てくらまぎれふぞ過したる人ハこまよとちまじりて右近のぢんハ物又み出きてこいぶれさどぎ笑ふとあめアーをかうハせぬるなり。上達部のつ

給ふ所ハの意也。うちとわしハ開放ち通しての意也。

今やうのハハ、やかうハハ講一や傍注云やうりのハ野郊場なりと

きあひーなどみ女房どものがり。上官などのある障子と皆うちとほーそこをみたりなどくるーがるものもあむどまきもいれぬ。屋のいとふるくてかいらぶきなれをみやあらん。暑さの世みあらぬハみまのともふるもふーたるもふるきおなれハむうでといふ物。日ひと日おちかへ。蜂のまれおなきみつあつまりたるなど。いとたそろーき。殿上人日ごとみまあり。物もあうし物つみをき。て秋をうりよや。太政官の地のいまやうれふをとならん。をどむじ出たりし人こそをうーかりし。秋あなりたむと。か

枕 紙 巻 四

又濱臣云やううハ
野干の音便りと諸
説ときりたし
うたへ涼しうらぬ
風のハ古今集の夏
と秋と行々ふ空の
通路ハうたへ涼し
き風やふくらんと
あるをうけて残暑
をいへるなり
是より三月廿日の
りとおわしき話也

人間の四月ハ白氏
文集ハ人間四月芳
菲尽山寺桃花始盛
開長恨春帰無覓處
不知轉入此中来と
あるをいふ

たへすゞーからぬ風のふがらなめり。はまがみ
虫の聲たまたまきこえたり。八日ぞかへらせぬ
ハ。七夕まつりなまどみせれいより近う見ゆるそ
ねどのせむぢれをなめり。

人間の四月 百四十段

宰相中将たゝのぶのぶらたの中将とまゐりぬ
へるふ人と出て物をどいふふいでもなく。何
まハいらなる侍をうといふふいさう思ひめ
ぐらしとゞこわりもなく。人留此四月をこそハ
といらへぬへるいみどりをうくこそ過たる
るなれど心えていふハをうき中よも女をう

心得ばと思ひたる
ハ文集の句を覚え
て居ざるをいふ也

ほそとの一ノ口
ハ私徽殿の東の廊
の第一の戸口なる
をいふ
まべりうせハ退出
せし也

露ハ別の涙ハ菅家
文章ハ露應別涙珠
空落雲是残粧髪未
成といへる句をい

なまどこそさやうの物にすれハせぬ男ハさもあ
らばふみたる歌をだまなまお不えなるを誠ふ
をうし内なる人もおなる人と心えむとおもひ
たるぞことわらなるや。

過さるる忘れぬ人 百四十一段

此三月三十日不そどの一乃口ハ殿上人あま
たてましをゆりくすべりうせなごしてとゞ頭
中将源中将六位ひとりこのりてふろがのりい
ひ種ふみ歌うたひなごするふ明をてぬたう。海
りかんとて露ハ別のなみだあるべしといふ
を頭中将うち出しぬれば源中将もろともふ

ふ也
いそきたる七夕ハ
三月三日ハ七夕の
詩を唱へた也ハ也

あうくちりみーハ
夜明をてたるをい
ふ
葛城の神ハ昔後行
者金峰山と葛城山
の間ハ岩橋をうけ
させし葛城神貌
醜き故昼の役を他
たりといへるを
捨せ集し岩橋の夜
の熱も絶ぬべし明
る他し葛城の神

いとをうーうずんたるふいそきたる七夕の
なといふをいそどうぬさぐりて曉の別のまぢ
のふとおおえつるまふいひてわびあうもあ
るわざうなるとすべてはさるまみてハりるる
思ひまをほむのハ口をききぞうかどいひ
てあまりあうくちりみーハかつらき此神今
ぞすぢなまきとてわけてれをーあしを七夕の折
はるをいひいでたやと思ひーうど宰相みたより
あひみーらバ思しというでうハ思ねどふえつ
けなどもせん文りきてとのもづらさーてやら
むたど思ひし不どふ七日ふまありあへし

どもふりさてて
こもその心なるべ
し
アけておえーみし
ハ露を分て降りた
るよて露ハ別のと
吟し給ひーをうけ
たる也
其れどみ見付な
もせんハ其七夕の
頃み見付て此をを
いそんとの意也
らちうこあきハ不
審し給へんとの意
也
いうてさはこ云々
ハ何とてさや
ふ又豫て覚悟せし
るのやうみ覚えそ
るへ給ひけんとの
意也
男ハてうけんハ是

バ嬉志くてそ敷のりなどいひ出を心とぞえぬ
ふすろふふといひとらバあやーなどやうち
うたぶきぬハんさらをそれよハきーるいそん
とそあるふ嘉おめりでいらつあへりしうバ
まことはいみドラをうーうりき目ごろいつ
しうと思ひ侍りしだふわが心なうらすきぐ
とおおえーにいうてさはこ思ひまうけたるや
うみのたまひんもろともねさがりいひ
中將ハ思ひもよらであるに有し曉の詞いま
ーめらるハ知らぬうとのあふまぞげみさし
つあどいひ男ハてうけんなどいひるを人よハ

ハ清少納言と齊信
卿のあひことそな
るぞし。

よき申なれハ、齊
信宣方申よけれハ
其子細をきりせ給
ひしなり。

いふちもななくハ
てうけんといふち
ハきりせたれと又
程なく他のあひ詞
をいひし也。

我もちりふける云
云ハ宣方の心なり。
向うて知たりと知
られんとの意なる
べし。

ごめん侍りやハ、暮
盤なり。いひふらん
為みいへるよせ詞
なり。

あらせむ。は君と心えそいふを。何ぞぞくと。源中
將ハそひつきて問へどいさね。はりの君ふ。お不
是のあへとうらみられて。よき申なれ。はきりせ
てたり。いとあへなくいふ。ちもたなく。ちううか
りぬるを。は。お。小強のほどぞ。な。ど。い。ふ。我。も
志りふけると。いつ。う。志ら。せん。と。そ。わ。ざ。と。よ
ひ出で。ごめん侍りや。まろも。う。た。ん。と。お。ふ。い。い
り。ご。ま。い。ゆる。い。あ。そ。ん。や。頭。中。將。と。ひ。と。ご。あ
り。な。お。ぶ。い。わ。き。そ。と。い。ふ。さ。の。み。あ。ら。は。さ。ご
め。た。く。や。と。い。ら。へ。し。を。う。の。君。ふ。か。た。り。聞。え。々
ま。は。ら。ま。く。い。ひ。た。る。と。悦。び。あ。ひ。し。終。過。た。る

をハあるし給えん
やハ心とけ給えん
やとの意也。源氏竹
河巻。ふ。衰。と。そ。ま。を
あ。る。せ。う。し。生。死。を
君。ふ。任。す。我。身。と
た。ら。ハ。と。あ。る。同。し
意。也。

さのみあらは。女
のさやう。ふ。人。は。靡
り。バ。不。定。の。物。ふ。な
ら。ん。と。の。意。也。

せうくといけいの
ハ。朗。詠。集。ふ。蕭。會。勢
之。過。古。唐。託。綿。吳。代
之。交。と。あ。る。を。い。ふ
也。

まをしならでもハ
宰相ふなし給はて
あ。と。り。し。の。意。ふ
て。上。達。部。み。な。り。て。
昔。の。や。う。も。ま。る

る。志。も。ぬ。人。を。い。と。を。う。し。宰。相。ふ。な。り。あ。ひ。し。を。
う。へ。の。お。ま。へ。よ。そ。侍。を。い。と。を。う。し。う。ず。ん。侍。り
し。も。の。を。せ。う。く。い。け。い。の。こ。び。や。う。を。も。さ。ふ
し。な。ど。も。准。り。い。ひ。侍。ら。ん。と。す。う。志。バ。し。な。ら。で
も。さ。ぶ。ら。へ。り。い。口。を。し。き。み。た。と。申。し。う。た。い
み。ド。う。笑。い。せ。あ。ひ。て。さ。な。ん。い。ふ。と。そ。な。さ。ド。う
し。な。ど。お。お。せ。ら。れ。し。も。を。う。し。は。れ。ど。な。り。あ。ひ
み。う。バ。涙。ふ。は。う。ぐ。う。う。ま。し。に。源。中。將。お。と。ら
ず。と。思。ひ。て。ゆ。ゑ。ご。ち。あ。ま。く。に。宰。相。中。將。の。侍。り
へ。を。い。ひ。出。て。い。ま。ご。こ。十。の。ご。み。お。よ。を。ず。と。い
ふ。侍。を。こ。と。人。ふ。ハ。似。む。を。か。う。う。ず。し。あ。ふ。た。と

らすおもくしくわ
れはなるべし。
いま二十の期ふ
ハ本朝文粹み教回
周賢者未至三十期
とあるをいふ也。

ぢんみつきあへり
ハ齊信卿の着陣し
給へるなり。

あらぬふい清少納
言の知らぬ也。
よくみせてハ齊信
の勢ふ似せて也。

かろくハまのふ齊
信ハ朗詠を習ひし

るをつふ也。
とちふたるなめり
ハ苟ふ佇みてうこ
ひしとの意也。

宰相の中將の徳見
る事云くハ空方の
詞よて清少納言の
出て物いふも齊信
の朗詠を教へし功
徳を見るとの意也
下みありなうらハ
常ハ清少納言苟ふ
有ても后官の侍前
ふたといひて留守
つらひて空方ふあ
をぬよとの意也
光なるふとらやいふ
ハ名の下の字を忘
れたるなり。

いへバ。なごりそれふおとらん。まさりてこそせ
めとてよむに。さらよわろくもあらばといへバ。
わびのすや。いりで。われがやうふずんぜでな
どのあふ。二十のごと。いふおなん。まぶていみじ
うあいぎやうづきたり。あといへバ。ぬごらり
て。わらひあましくふ。ぢんみつきあへりけら。おふ
わきてよび出て。かうなんいふ。終そこを。いへ
へといひ。くれハ。笑ひて。教へける。と。あらぬよ。つ
ねぬの。と。よて。いんどく。よく似せてよむ。ふ。あ
や。く。て。こ。い。こ。そ。と。と。へ。バ。あ。み。ご。あ。ふ。な。り。て。
い。んど。ま。の。ま。こ。え。ん。か。ろ。く。ま。の。ふ。ぢ。ん。み。つ。き。

たりしに。と。ひ。き。て。と。ち。ふ。と。る。た。め。り。誰。ぞ。と。ふ
く。ら。ぬ。け。し。き。よ。て。と。ひ。あ。れ。バ。と。い。ふ。も。わ
ざ。と。は。習。ひ。給。ひ。ん。と。う。け。れ。を。これ。ご。み。き
け。む。出。て。物。た。と。い。ふ。を。宰相の中將の徳見る事。
そ。な。さ。ふ。む。ら。ひ。て。を。ぐ。む。ぶ。し。な。ど。い。ふ。と。は。に
あ。ま。あ。ら。上。み。な。ど。い。し。する。ふ。これ。を。うち。い
づ。き。ハ。御。ハ。あ。ま。な。ど。い。ふ。お。ま。へ。ふ。か。く。な。ど。申
せ。バ。笑。を。せ。め。ふ。内。の。物。忘。た。る。目。右。近。の。さ。う
く。ま。ん。と。つ。あ。あ。と。う。や。い。ふ。もの。し。て。さ。う。紙
ふ。か。ま。て。お。こ。せ。と。る。を。足。れ。を。さん。ぜん。と。する
を。今日。ハ。清。物。い。と。あ。て。な。ん。と。十。の。ご。ふ。お。よ。を。

其のハ過ぬらんハ
室方の年齒をこま
ふれていふ詞なり
二十歳ハ過て四十
餘五十歳おもあら
んとの意也前漢の
朱賣居り妻買居り
貧しきを疎きて去
んを清ひしハ
富貴今己四十余矣
女若日久待我富貴
報女功とをへハ
さめしむあるふよ
りてうい返すせる
なり
うへの侍あり帝を
いふなり
いりてりける事ハ
前漢書を知りたる
を唐威の詞なり

ばハいりてといひたればかへりごとくよそこハ
さぬらん志ゆをい居がめををへけん年ふを
もとかきてやりたりしを又ねとがりてうへ
の侍ありもそうしければ宮の侍かこふ渡らせ
たまひていうでかゝる子いありしぞ曰十九ふ
成るる年こそさハいましめられとてのぶりた
ハわび志ういそれみこりといふめるハと笑を
せぬひしこそものぐるほしうりける君うあ
是之しり

うちふし 百四十二段

こきでんとハ閑院の太政大臣の女侍とぞきこ

おもしまいしハ濱
居云おもしまし
ハの音便なりま
てをまいてといふ
小同し
清とのみ宿直也
とのみ所をこふハ
我不休所をありと
も給まの意也
まことふ人ハうち
ふしやすむ所ハ
清少納言の詞も
彼うちふしむすめ
左京り子を秀句ふ
いへるなり

ゆるる侍りたふうちふしといふものゝむせめ
左京といひてさぶらひけるを源中納りこらひ
ておもふたど人々笑ふ比宮の志きふおそしま
いしふまゐるまで時ハ侍とのみなどつううま
つるべわれとさるべきさまふ女房たどもてか
しぬをねがひいと宮づらへおろうみさぶらふと
のむねをさふあをりたらんハいみぢうまめふ
さぶらひあんなどいひるあひつまば人々がよ
なごといふぞふまことふ人ハうちふしやまむ
所のあるこそよけさる阿たりよそ志なくま
るり給ふなる物をとさしいらしりとしてすべ

すべて物きこえず
云々ハ宣方の詞小
て法少納言ハ口
かなりらす我方人
とたのみしふとの
意也
人のいひふるした
るハ世の人もは
いひふるすふそれ
と聞きさまふれ者
也
ほとわりの濱云
今俗にあつくある
といふ不同じく腹
立ちいふるをいふ
あらんといへり
うのいふせ給ふハ
法少納言のをしへ
ていふすると宣方
の恨み給ふとの意
也

てもものきこえずかこ人とたのこきこゆさび人
のいひふるしるさまふとりなほしめふたどい
みどらまめどちて恨みあふああやしいうな
るるをうきこえつる。又聞とめめあふるなほし
あどいふうたいらなる人をひきゆるがせをさ
るべきこともなきをとり出給ふさまこそ
あらめとて花やうふわらふふ是もりのいそせ
あふならんとていと抱しと思へるまよさやう
のうをなんいひ信らぬ人のいふだよふくき物
をといひてひきいりあしうを後にも後人もは
ぢがまききいひつけたると恨こて殿上人の

こえてやみあふみ
けりハ宣方の左京
と中絶しとの意也
うげんべりののこ
みハ、鏝綱の縁の畳
也
ぢずりの地摺りて
白き絹ふ鏝色のこ
もんをとりたる
をいふ
花うへりたるハ鏝
の色さめたる也
急ぎのめくらまきハ
衛士の非常さまも
る物なれハなり
七尺のりつらハ長

笑ふとていひ出たるなりとのめくらまきハさしてハひ
とりをうらみあふべくもあらざめるあやしあ
どいハバそのちハこえてやみあひあなり
むらゝ抱がえてふようなる物 百四十三段
うげんべりまきハ、みのありて、あし出きたる。
から急の屏風のおもてそこあをれとる。 友の
ころりたるねの木かきたる。 ぢずりの裳の花
うへりたる。 急ぎのめくらまき。 きちやうのこ
たびらのふまぬる。 もかうのたきありぬる。
七尺のかづらのあうくたりたる。 えびぞめの
おり物れをひうへりたる。 色ごのまれ老くげ

きりもいふその年へて色りたりたるいふ用也と也えひそめの云々ハ薄紫也紫ハ榛の炭をさすものなれハ其色のさめたるを灰りへるといふ也六位の頭白きハ若きハ末の昇進ののちけかれと老たるハ頼まなしとの意也人の事をいふハ事を成就せんとするさすなり一番ふりつすぐハ末のまけもあつたれハなり經ハ不斷經ハ常ふ挽むましきの極みうき意なるべし

不きたる。面白き家のまどちやけさる池あどいさなぐらあせどうき草みくさ志がりてたのもしげなき物 百四十四段
心みどろくて人志まがちなる。むこのよぐさぐちなる。六位のかしら白き。やごとする人のさすがよ人のみなりが不み大るうけたる一番ふかりまぐ六。六七八十なる人れこちあしうちて目ごろふなりぬる。風吹よ帆あげたるふね。 經をふごんぎやう。
ちろくてと不き物 百四十五段
まのほとりのまつり。おもそぬはらから志ん

まのほとりのまつりなとへハ春日ハ幡など速き所も其後式ハ宮中よてあれハ近くて速きなるを。くらまのつらまをりハ今鞍馬ハ七曲といふ道あり近き道をまうりのなれハ速きなり。でくらハ阿弥陀經ハ西方還十方便佛土有世界名曰極樂と又阿弥陀佛去此不遠ともとけるさなるを。舟の道ハ三四十里の道も風よなれば一日一夜もゆきまかりべし。男女の中ハ男女其

ぞくの中。くらまのつらまをりといふ道。まの晦日む月一日のほど。とほくてちろき物 百四十六段
ぐくらく。舟の及。男女の中。井ハ 百四十七段
おまうねの井。まじり井ハお板あるがをろしき。山のおさしと浅きためしおまをこめけん。あすり井。みもひもさむしと不めさるこそをろしなれ。玉の井。せう志やうの井。櫻井。まはきまちの井。千貫の井。
受領も 百四十八段

類甚と異なるもの
なうら夫婦合伴の
理の遠くて近と
いふべし。
ほりうねの井の武
藏國也。近江
國也。
山の井云くハ万葉
集ハ浅香山影さへ
見ゆる山の井の浅
き心ハ我思をふく
みとある類いと多
し陸奥國也。
あすり井云くハ催
馬樂不志香井は宿
りのすべし陰もよ
しこもひもさむし
こま草もよしとあ
るをいふ也。
せうちやうの井ハ
少羽の井大炊門
の南あり。

紀伊守 和泉
やどりのつらされごんのりみこ 百四九段
下野 甲斐 越後 筑後 阿波
大夫ハ 百五十段
式部大夫 左衛門大夫 史大夫 六位藏人
思ひらくべきもあらばかうぶりえて何の
大夫権の守などいふ人の板屋せびき家もたり
てまたこひ垣など彩らしくし車やどりふ車引
として近く本おなく志で半つたがせて草など
かをするこそいとみくけき危いと清げめて紫
がを志ていふすけわたしてぬのはうどはり

受領ハ國司のこと
をいふ也。
紀伊守ハ上國なれ
ハ後五位下也和泉
ハ下國よて後六位
下なり。
やどりのつらさの
権守ハ官の外記お
との五位あるなり。
頼て顯職ハ任しり
たきを外國等お志
をし任すこれハ官
と宿す候なり。権守
ハ職原抄云権守者
近代多邊送授也。送
授とい任國ハ赴か
ぬといふなり。
下野以下五國ハ皆
上國よて権守ある
なり。
大夫ハ侍の叙爵せ
しをいふ即ち八省

てままひさるふるハ門つらささせなごるおこ
おひさるいみどうおひはきあく心づきたましお
やの家志うとをさらなりをぢ見たどのすまぬ
いへささるべき人のなうらんをおのづらむ
つまじううち志りたる受領又國へ好ていこづ
らなるはらばハ女院宮をらなどの屋おまご何
るふつらさまち出て後いつらとよき石尋ね
出て任たるこそよけき。
女のひとりすむ家 百五十一段
女のひとりすむ家などハさういさうあきてつ
ひぢたなどもまごうらず池あどの阿るおハみく

の丞左右衛門尉おと五位みなりたる時中務大夫式部大夫をといふ侍の面目なり。こひろきハ小檜垣なり。前近く云ハ庭の度らぬをいふ也。はまらをしてハ紫の華より簾をかけたるといふ也。ぬの障子ハ布障子なり。おひさきたぐハ行さきのねまきとさきのねまきといふ也。おやの家云ハ是より彼門強くさせなるといふハ子の心つきなきふけて後べき家ハ後初よて

さる危なともいとよもぎたぐりなごこそせぬどもお々すなごの中よりあをき草んえさびりげなるこそ哀なれ物うこげふなだらかみすりして門いさうかめきりぐまきハいさうたてこそおぢゆれ。宮つりへ人の里 百五十二段 宮つりへ人の里なども親どもふりあるそよし人志かく出いりおくれりたよ阿まこさまぐのこゑおやくきこえ馬のおとしてさわがしきまであれどかなしきれど忍びてもあらハまてもおのづから出あひけるをあらでとも又いつ

少しあれたるやうなるうよきまをいそんとて其後初の音ハうくるたくひなるうよしとさまざまあつてけたり。つらさまち出てハ枝お仕し得て後よすむこそよけれとの意也。なたらちよすりしハ大抵不見よき程ハ修理してなり。きりくしハ急なしたるさま也。人志かく出いり云云ハ宮仕する余情こそ賑きやうなれと父母たきハ便なく悲しとのさま也。出給ひけるをあらてハ忍び男の相也。

のまありあふなごもいひふさりのぞく心ぐけたる人ハいっぐハと門あけなどするをうたてはこごうあやあげふ夜なるまであごあひとるなしきいとみくしおを海門ハさしつやあごどハすまばまご人のおをすまばなどなまふせがーげにあひていらるふ人出あひたがとくさせはごらハぬま人とおわうりなごいひたるいとむつりう。うちきくごよりハ人れともなるものどもこれうく今や出るとよえむはーのぞきてなしきる物どもとわらふべかえりまね打するもきいてをいうよいとさきび

心うけたるハ達見
ん隙もやと心うけ
し人のさま也。
うたてさじりう
ハ夜中まで騒ぐ
心もとなりて守
ることの他一きさ
あるへし。寝かき
の里事あれハ家主
の心ももあらせ
家守あとのきひし
く守るふつけて也
なまふせうしけ
ハ彼とひ来てある
人を防さるましく
いとこしけハ門守
のいふ也。
このかく今や云く
ハ門守の客も今や
出給えんとてのそ
き伺ふを客の世人
の笑ひてまねびか

しういひとがめん。いと色ふ出ていとぬも。托も
ふ心なき人ハ。必きなどやする。さきどすく。うら
なるうたハ。夜ふけぬ。門もあやふりなるとい
ひていぬるもあま。まことよ。心ざし。ことなる人
ハ。もやなどあま。こびやら。るきど。寝居あり
せむ。たびく。ちま。く。ふ。あけぬ。ま。ま。し。き。を。め。づ
ら。りに。忍。ひ。て。い。ま。じ。き。門。と。こ。よ。ひ。ら。い。さ。う
と。あ。け。ひ。ろ。げ。て。と。す。え。ご。ち。て。あ。ぢ。き。な。く。曉。ふ
ぞ。さ。す。た。る。い。う。づ。ふ。く。き。お。や。そ。ひ。ぬ。る。ハ。な。や
こ。そ。あ。れ。ま。し。て。ま。こ。と。な。ら。ぬ。ハ。い。う。ふ。あ。ふ。ら
んと。さ。へ。づ。ま。し。う。て。せ。う。と。の。い。へ。な。ど。も。け

とすとのさなり。
このりく一本おけ
ちりくとあり。
色ふ出て云くハ彼
来訪ふ人のまとい
ふなり。
やらさるハ。逐る
る也。
おやそひぬるハ。
親の守りぬる人ハ。
門守のむつりき
よう。猶つ。ま。し。く
こそあれとのま也。
ましてまことあら
ぬい。ま。つ。し。き。托。也。
さそあらんハ。見か
とのすハ。寝思ふ
人ふ逢るのつ。ま
し。ら。ん。と。の。ま。也。
心う。こ。く。も。な。く
ハ。門。心。う。こ。け。あ
さ。ず。て。の。ま。也。

ふきくふハ。は。ぞ。あ。ら。ん。敷。中。曉。も。ふ。く。門。の。と。心
ぐ。こ。く。も。な。く。何。の。宮。内。と。り。の。殿。を。ら。なる
人。く。の。出。あ。ひ。な。ど。し。て。か。う。し。な。ど。も。あ。け。あ。ら
ら。な。れ。敷。を。あ。ら。し。て。人。の。い。で。ぬ。る。の。ち。も。見
い。だ。し。た。る。こ。そ。を。う。り。た。れ。ま。あ。な。ど。を。ま。し。て
い。と。こ。う。し。首。あ。ど。ふ。き。て。出。ぬ。る。を。我。ハ。い。そ。ぎ
ても。ね。ら。れ。ぬ。人。の。う。へ。な。ど。も。い。ひ。歌。な。ど。か。こ
り。き。く。ま。つ。に。ぬ。い。り。ぬ。る。こ。そ。を。う。り。た。れ。
雪何の山ふ 百五十三段
雪。此。いと。た。り。く。ハ。あ。ら。で。う。ま。ら。う。よ。ふ。り。た。る
な。ど。た。い。と。こ。そ。を。う。り。け。ま。又。雪。の。いと。高。く。降

笛かしてふきてハ彼
りたる人のふく也

あこれなるもやう
しきもハ世中の哀
なる予面白きやふ
とともものまじり

おれえちやくこある
ハふとをうく来か
ふ人也
なんでもふみさそ
りの何この故障よ
て今まありしとの

つみとる夕ぐれゆりそちううおたのし心なる
人ニ三人をうり火をけ申ふすゑて物ぐりな
どまるわどよくらうなりぬれバこたよこよそ火
もともさぬふ大うこ雪の光ゆと白う見えたる
ふ火をそ志てをひたどかきすすびてあひれな
るもをうしきものひあをすこのそをうしぬれ
ふひもさぬらんとおもふわどふぐりのおと近
うきこゆればあやいと見え出たるふ時くうや
うのねおがえなく見ゆる人なりたりやふの雪
をいうふとぬひきこえながらあんでふことよ
さいりそふふくらうしつるよしななどいふ今日こ

老也

今日こん人をハ拾
後集ハ山里ハ雪ふ
りつみて道もなし
今日こん人を哀と
ハこんとある教也
こらふこハ園座也

内よも外よもハ内
の女方も来たる
男ものさあ
あけくれハ夜あけ
んとそをさしくら
くたるをりふ
雪何の山ハハ朗除
ハ曉入梁王之苑雪
満群山とあるとい
ふなるをし

雪月花のときハ朗
詠ハ琴詩酒伴皆抛

ん人をなどやうのすぢをそりふらんうしひる
よりあまつるもどもをうちをドめてよろづの
るをいひしらひわらふざさし出されどかこつ
うたのあハハ志もあがらあるふかねのおとの
きてゆるままでふなりぬれど内よも外よもつるもど
もハありずぞお不ゆるあけぐれのおどふりへ
るとそ雪何の山よとてるとうちすんどたるハ
ゆとをうしき物なり女のりぎり志てハさもえ
るあかさばらましを只なるよりハゆとをうし
うすきたるありさまなどをいひ合せたる

雪月花の時

百五十四段

我雪月花時最憶君
とあるを奉じたる
みこりやうのせり
も我君と思ひ奉る
とのまをまぶし。

同じ人ハ兵衛丸人
といふ也

村上の時時雪のいとたうり降さりけるをやら
きふもらせぬひて梅の花をゆして月いとあり
きふ是ふ歌ふぬいりいふべきと兵衛の丸人
ふさびたりけむ雪月花のとまきとそうしたり
けるこそいとトうめでさせぬひれうさなど
よまんふそよのつねなりかう折ふあひたるみ
なんいひがなきことそおやせられられ

すびつの煙 百五十五段

おたぐい人を傳供よて殿ふくさぶらひざりける
なごごすませおひますふすびつのなごり
のたちけむばのまい何のなごりそんてことお

つみの云々の
秋ハ沖を爐よりけ
て煙の火よりくれ
たるをいんとして
よめるなり。

こあきのせんとハ
万歳云様寒なる齋
院室の類なるへ
しふあれハ齋院の
あるしめすすなれ
ハ齋院の女官をり
くいふなりん
ころらハ髻也
いこりうせさせハ
佛鐘を給ひりと

なせらむられば又て返りまゐりて
わさつみのおきよこがるゝ物えれをおまれ
つりちてうへるなりなり
とそうしけるこそをうけられかへるのとび入
てこがるゝなりなり

ともあきらのおほきみ 百五十六段

こあれのせんと五寸ばかりなる殿上わらもの
いとをうりげなるをゆくりてみづらゆひさう
ぞくなごらるいりくして名りきてたてまつら
せたりけるよともあきらのおほきみとかきた
りけるをこそいこりうせさせぬひれ

の表也。

ふひまゐり 百五十七段

これとあり云々
ハ繪のいれを中
宮の仰せきりま
なるべし
とらつきよま
たるおわとのあ
らハ高杯よとも
たる燈也よの常
灯基ならてひき
ゆ糸髪のをなとも
よく見ゆとのさ
いみトう白ひたる

宮みをドめてまゐりたる比物のなづき
かむあらず洞もねちぬべりれをふるくまゐり
て三尺の布几帳のうしろはぶらふよゑなご
どり出てんせあふごよもえさし出まどうわ
まなしこれハとありかれハりりまなごのあそ
するふごらつきふまゐりたるおわとのあぶら
なればかみのもぢらなごも中々ひるよりハけせ
うふんえてまむゆけをどねんどて見なごをい
とつめたきころなればさし出させあくる時
れわづらふんゆるぐいみトう白ひたるうま

云々ハつめたき故
中宮の布の赤み
て色のうつくしき
をいふなり

いりてすちりひて
もハ何とらして真
向からてそめて
も見えまあらせん
とのさ也
布格子もまあらす
ハ格子明けぬとい
ふ
まをなと仰せらる
れハハ替格子をあ
くなのさなり夜明
ぬとならハ清少納
言の帰るへけれハ
とそなるべし

梅なるハりぎまあぐめでたしとんしらぬさと
び心地ハハいりぐハかゝる人こそ世よおハ
ましくれとおどろろるままでぞまもりまら
まる曉ハハとくたをいそぐるかつらきの神
もあをいなどおせらるるをいりですぢりひ
てもゆらんぜんとしてふしこれを清かうしとま
あらず女官まゐりてこれをあせあんといふ
と女房きしてそなつをまてなごおせらるれ
バわらひてかへりぬ物なごをせあひのこま
をするよ久しうたりぬまバおりまわしうたり
ぬらんさハをやとてよさりハとくと仰せらる

いさりい、雷いハ
の意也。
あけちらハ、市前
より清少納言の返
るやいなや、格子を
明放ちたる也。
このつがねあるト
ハ、清少納言のひる
ハ宿りあるる局の
あるト也。
いとあへなきまて
ハ、彩条の清少納言
をあまりなるまで
召まつてせ給ふハ、
后宮の志心こそあ
らめとのさなり。
たゞいそぐし出
すハ進め出す也。

る。あざりかへるやおそきと、阿けち迄とるよ、雪
いとをうし、なふハひる津くさまるれ、雪よくも
りてあらハよもあるまどなどたひくめせむ、こ
のつがねあるトも、このみやこもりあふらん
とする、いとあへなきまで、清まへゆるさむたる
ハ、おぞしめすやうこそあらめ、あふよとがふハ
りくきものなるをどとく、たゞいそがし、り
そがし、いだせば、わさるもあらぬ、ちち
まゐるものから、まゐるもいとぞくるし、きや
火たき屋のうへ、又降つてとるもめづらきや
うし、清まへちちくハ、れいのまびつの火こちと

ちんのひをけのな
し、るハ沈の火桶也。
なし、繪ハ、梨地の類
なるへし。
まゐるひけるハ、
茶中室の志介錯な
とする人なれハ、
前ちちく侍る也。
やすらなるを、
清少納言のうひ
ひしきみ人々の言
つらへ馴て進退安
けたるう羨しとの
意也。
清まへつぎハ、
本み清文とあり、清
ふハ中宮の清封み
て封戸也、ともいへ
り。
いつの世ふり云く
ハ、いつさやうみ仕
へなれとの意也。

とくおこして、それふハ、わざと人をむ、宮ハち
んの清火をけのなし、るあさるふむらひておハ
します、くらふあまらなひし、あひけるまゝ、に、ち
りく清ぶらふ、つぎれ、あみながすびつ、よまな、く
あさる人々、からきぬき、それとるあどなり、やす
らなるをみるも、うらやましく、あふとりつぎ、
たちあふるまふ、さまたなど、つ、ま、けならは、物
いひ、あさ、わらふ、いつの世より、さやう、あま、じら
ひならん、とおもふ、さへ、そつ、ま、き、あう、より
て、三、四人、つどひて、繪など、見るもあり、志を、一、阿
りて、清、まへ、ちち、う、お、ふ、こ、あ、す、れ、バ、殿、ま、あ、ら、せ、ぬ

ありては、奥へ
さきさうらう招ふ
車の前駐おふこゑ
なり。
さすりみゆらき
なあり、引入りな
ら猶見まらせ
まわしき心も我
あからさすりみ几帳
の綻ひめうりのそ
きとのさ也。
大納言殿ハ伊周公
也。一め道隆公あ
らんとおもひて落
ちりたる物をさう
つらひたりし也。
なもなしと思ひけ
るよ、捨集山、山
里ハ雪ありつとて
なもなしけふこん
人を哀といこんと

ふなりとして、ちりたる物ども取や置などするふ
れくみ引入て、さすうみゆる志きたありと、几帳
のふころびよりわづら見ゆれと、大納言殿
はまゐらせあふなりなり、直衣さしぬきの紫
れ色雪ふをえてきうし、しらのもこふあひ
て、きのみくおひみよて侍れど、重のいさくふ
りて侍を、おおつうなさになどのあふ、ちも
なしと思ひけるふ、いでうとぞ、いらいあな
るうちわらひあひく、あはきともや、あらんずる
とて、などのあふ、清ありさま、いこれより、何事
うまさらん、物語あいみど、う口みまうせていひ

あるまのふなり。
さうさざめりとお
ほゆ、此伊周公の
さまと見る、けふ
昔物語み、さあ、く
のう人をほめ、さ
もさう、さうと、さ
とのさ也。
現み、いま、ハ現在
み、やうの、あり
さま、い、ま、こ、ね
ハ、愛、う、と、思、ふ、と、の
ま、さ、り。
めもあやみ、目も
後、さう、目も、及、ま
に、お、し、ろ、ろ、る、也、
清、少、納、言、の、初、く、し
くて、恥、き、かる、べ
し。

たるまども、さう、さざめりとりとおおゆ、さあ、志
ろき清ぞどもに、おのうらあや二つ、白きからあ
やと奉り、さる、志ぐ、のか、らせああるなど、あ
みりきたるをこそ、かゝる、み、い、え、る、み、現、み、ハ、ま
だ、あ、ら、ぬ、を、愛、の、心、ち、ぞ、ま、る、女、房、と、物、い、ひ、と、ま
ふ、れ、な、ど、い、あ、み、と、い、ら、い、さ、う、を、づ、う、と
も、あ、ひ、さ、ら、ず、さ、え、か、し、そ、ら、ご、と、あ、ど、の、あ、ひ
か、く、る、と、あ、ら、ぐ、ひ、痛、ト、な、ど、き、こ、ゆ、る、ハ、め、も、あ
や、み、浅、ま、き、ま、さ、で、あ、い、な、く、お、も、て、ぞ、あ、り、む、や、
あ、く、ご、物、ま、あ、り、た、ど、い、て、あ、ま、へ、あ、も、ま、あ、ら、せ
給、ふ、清、几、帳、の、う、ら、あ、なる、ハ、誰、そ、と、問、あ、なる

さちておをすのハ
伊周公の清少納言
の方へおをす也。外
へやいさして外さま
へおをすのふりと
思へるとのまこと也。
御みさありしハま
実ハ清少納言を思
ひてありしとこそ
ふれのみまふなる
べし。
ふそふんやり奉る
たハ前ハ几帳の
綻ひより僅し見入
ましたふのまこと也。
行幸なりと見ふハ
年来行幸なりと見し
おハ伊周公借奉り
て清少納言の物見
る車と見おこせ給
ひさへのまこと也。
おやけなくハ負氣

べし。清少を申すふこそあらめ。さちておをすの
を外へふやあらんと思ふふいとちううるあひ
て物あどのあふまごまらざりし時。おおきぬ
ひけるるななどのあふまことふさ有しなどのあ
ふふ。清少几帳へどてふそよ見や。里なるだよを
づりか。里つるをいと清少。うさ。むらひき
こえさる心地。現ともおおえむ。行幸など思ふふ。
車のかさみいさ。うみおこせあハ。下すされ
ひきつくろひ。すきうげを。やとあふぎを。さ。か
くも。程いと我心。あがらもおおけなく。いうで立
出ふ。ぞと。あせ。あえてい。ミド。きふ。何。を。かき

おくよて。思多くも
な。こ。い。ふ。ま。を。り。
か。こ。き。う。げ。と。云
々ハ。我。願。と。う。く。す。
う。た。ト。け。な。き。影。と
頼。ミ。た。る。扇。さ。へ。も。
伊周公の取給へる
ふとのまこと也。
ふり。う。く。べ。き。髪。の
云々ハ。扇。さ。へ。と。ら
れ。さ。れ。ハ。せ。め。て。面
う。く。ふ。髪。を。ふ。り
か。け。ん。も。見。く。る。
か。ら。ん。と。思。ふ。ふ。と
のまこと也。
さ。る。け。き。や。ハ。恥
た。る。心。の。頼。ふ。も。や
見。あ。ら。ん。と。のまこと也。
白。き。も。の。ハ。白。粉。を
い。ふ。也。
ろ。ん。な。う。ハ。勿。海。の
ま。也。

こえん。か。こ。き。う。げ。と。ゆ。げ。た。る。扇。を。は。へ。と
り。あ。へ。る。ふ。ふ。ま。う。く。べ。き。か。み。の。あ。や。さ。は。へ
ぬ。ふ。よ。す。べ。て。ま。こ。と。よ。は。る。々。き。や。津。き。て。こ
そ。え。ゆ。ら。め。と。く。立。あ。へ。な。ど。お。も。へ。ど。扇。を。手。ま
さ。ぐ。り。み。て。繪。を。さ。ぐ。か。き。た。る。ぞ。た。ま。の。あ。ひ
と。と。み。よ。も。さ。ち。あ。そ。ね。バ。袖。を。お。あ。て。う。つ
ぶ。い。る。さ。る。も。か。ら。き。ぬ。ふ。あ。ろ。い。と。の。う。つ。り。て
ま。ご。ら。よ。な。ら。ん。う。く。久。あ。う。あ。ひ。た。り。つ。る。を。
ろ。ん。な。う。く。る。と。お。も。ふ。ら。ん。と。心。ほ。さ。せ。あ。へ
る。よ。や。こ。れ。え。あ。へ。是。ハ。さ。ぐ。か。き。た。る。ぞ。と。き。こ
え。さ。せ。ぬ。ふ。を。う。き。と。あ。ふ。に。あ。ひ。て。見。信。ら。ん

枕草子 卷四

給ひて云々ハこれ
ハ給ひてのさ也

身のやと云々ハ
少納言今廿歳ハ
やありけんりやう
の今めかき戯ハ
年齡も身のやと
みも相應せまとの
さ也
人のさうかながき
たるを草假名あり
后宮の見せ給へる
繪草紙のみなり
注がみりあらんハ
伊周公の詞也
一所ハあるハ
伊周公一人さへ取
じきふその上のさ
也
同一直衣の人ハ中

と申しぬへバ。程こゝへとのこまはをきバ。人を
とらへてさて侍らぬなりとのあふいと今めり
しう身のやど年ふいあはむかこいらいしう人
の侍らななきさる草紙とり出て侍らんは注
がみりあらんかれよ見えさせぬへ。それぞ世よ
ある人の手ハ見えりて侍らんと。何やしきまど
もと只いらへさせんとあふ。一ところさるさる
るふ。又侍きうちおはせて。おたごあやしの人ま
るらせあひて。これハ今すこし花やぎさるがふ
みなまどうちし。なめわらひ無ド。われも何がう
とあるまうらゝるまなま。殿上人のうへあど申す

納言降家卿なるハ

これハ以下ハ女房
達のさま也大納言
殿よりもなれてき
こゆる也
さるううハ。棟樂ふ
てされこ也
これ何うりハ
此詞上ふつゝり也
若し落字なとある
ふや
程いとへんげの物
ハ。少納言のうひ
くしき心よハ。変化
の物天人なとやう
みまえしとのさ也
いりみりことい
りてりハ思ひ奉ら
ざらんとのさ也
たいもん所ハ。后宮
の女房の侍所也

をきけむ程いとへんげの物。天人なまどのおりき
たるふやと覚えてし。を侍らひなれ。目比まぐ
れば。いとさしもなきさ。さふこそまぐれ。くくん
るんも家の内出そめなん。をさこそハ。覚
えけめど。くくもてゆく。おのづらおもな
まぬべし。おあど侍せらまて。我ををおもふやと
とをせの。侍いらへみ。いりよりハ。とけいむる
ふあせせて。ごいもん。おれ方ふ。を高くひこ
れば。おあ心う。そらごとする。なまたり。よしと
ていらせぬ。いりでり。そらごと。おをあらん
よろしう。ごおおもひ。きこえ。さす。べき。まか。え。は

そらことする也けりハ思ふとい偽ならん隣みて嘖これハと戯れ給へる也ふろしうなまハ大方みふのさ也こりさるとりもハ人のとなひさる時又となひ返さねハまろしといふこと世俗もいひならせせるさなるべしえんなる文ハ后宮の法文也
いうみして云ハ偽ならずといふをいりふしてあらん若し偽をれの神あらそこそ知るへたれとのさ也
あけしきハとハ后宮の法気色かく也

かこそいそらごと志されとおがえてさしてまどがかくみくきわざしつらんと大うさ心づまあしとおがゆれをわがはるおもおひひぎりへしとあるとましてふくしとおもへどまどろゆゑ志されともかくもけいあほさで明ぬれバお里たるすあいちあさみどりなるうまやうふえんある文をもてきたりこれバ
いうみしていうふあらまじいつをりをそらにさすまの神ありせむ
となん法なりしきハとあるふめでよくも口をくも思ひこざるにあらふべの人ぞよづねき

と右筆のそへたる詞なり

よべの人そハうのとなひさる人といふ也
うすきこそハ薄き思ひこそむらなき嘖なとも妨けらるへたれこれハ直実なる故不偽と思召れんやそらき牙の不幸思ひあられて俺しきとのさ也志きの神ハ戦神として呪詛なるとみりて災をなす神あり折しも嘖たるをさうしてさやうふありけんとあやしむ也
あさりりななるい

うまをしき

うすきこそ扱れもふらめはな故ふうき牙のやどを志るぞわびしき
程こまバうりのけいとなやさせあへ志きの神もおのづうらいとろしとしてまゐらせでのちもうたておしもあどてさはたあまらんいとをりし
あさりりななるもの 百五十八段
正月一日のつとめてさいそよえあひたる人
きしちふよびの藏人よがかりうする子かしたる人のたりき 除目ふそれ年の一の園えさる

慢したる也。正月一日のつとめ
云くハ世俗ハ
元日たなひるハ長
命の相といへ也
きしるふとびのハ
翁人の鬨をあまた
望み争ふ時のこと
也。
いとことやうみ不
ろひてハ、吳様ふは
ひて外國ハ沈滞す
るものをもよさ也受
領ハ於庭奉公の志
ある人ハ本とせ
ず唯所務場分ある
故ハ望むなり。さる
からよことやうみ
云こといふなり。
けんさハ修験者也
るふしきハ掩韻也
そを推あてたる也

人のよろこびあどいひて、いとかこころなりぬ
へりなご人のいふいらへよ何ういこととやう
ふほろびて侍るなればなごいふと志こりぐや
なり。又人おやくいどみさる中みえられてむ
こふとらむたるも我ハと忠ひぬべし。こをき
おのけてうぶさるげんざ。あふとぎの明とう
志さる。小弓いるふかよつうとれ人志いぶき
とよまぎらひしては日ぐふねんどて音高うぬ
てつてさるこそ志こりぐやなるけ志きなれ。
ごをうのふさをかりと志らでふくつけさハ。又
ことよよかこぐり何りくふことかこよりぬも

明けといふ也。
ふくつけさハ貪り
うまきさ也。

つるさうハ退後也。
もどりの公連ハ
攝家大臣の息子也

なくしておやくひろひとりさるもうきうら
じややこりうようちわらひさのうちよりハ
なこりうなり。あつてず里やうふ成さる人
のわききこそうきいげなれとづりみあるせん
ぎのなめげふあぶづるもねとと思ひ聞えお
ぐらいりせんとしてねんど色つるふ我ふも
まさる者どものかこまりたぐ作うけたまハ
らんとつるさうするさまをあまし人とやハ見
えさる女房うちつらひんえざりし稠度はうぞ
くのわきいづる。ず里やう志さる人の中将ふ
なりたるこそもときんごちのなりあがりする

てハ近衛の中少将
をへて納言以上よ
のなる人々をいふ

受領もさこそハハ
受領も大上國の守
みなりしハこそよ
しとのさ也
あま國不行てハ
数多他國の受領と
経て合格の人とい
ふなり
上達部ハ宰相以上
をいふ也

ふりもげごうう志よりが初よいみどう思ひこ
め也。くらゐこそ終めでときおふとあれ。同ド
人かざら大夫のきみや侍後の君などときこゆる
おハいとあなづりやまき物を中納言大あごん
大臣などみなりぬるハむげみせんうこあくや
んごとあくおぢえあふりのこよあさよ。やどく
ふは々てハ受領もさこそハあめ也。あま國ハ
坊て大貳や四位などになるまで。上達部みなりぬ
まバおもくハはごどさりとて。やどすぎあみを
りりのみりハある。又おやくやハある。ずりやう
のハのりたあてくごるこそよろしき人のさい

又多くやハハ大貳
四位などみなるハ
稀なりとのさ也
猶男ハ云々ハ女の
后みなり給ふやう
猶男のなり出たる
ハ志よりみなり
とのさ也
何ういふハ内供
奉の禪師などとい
ふなり
何よりと見るハさ
まてもなりとのさ
なり
ありくりハ形懸
り斗こそつくろへ
何のうひもなりと
のさ也

をひふハ思ひてあめれ。たゞ人の上達部のむ
まめふて。后みなりあふこそめでとわれ。されど
後男ハ我身のなり出るこそめでとくうちあふ
ぎたるなりきよ。法師の何ぞハ供養などいひ
てありくあどの。何とらを見ゆる。短ふとくよ
みんめきよげなるふつけても。女よあなづられ
てなりか。アこそそす也。僧坊僧正も成ぬまバ佛
のあらハまめへるふこそ。おぢまどひて。か
こまるさまハ何ありハ似よる。

風を 百五十九段

あらし。こがらし。三月ばかりの夕暮ふゆる

夏とやたるハ一夏を通したる綿綿也

此すゞしとみ云ハ夏のあつくりし程ハ生絹とみあつくるしありしみのさ也

く吹とる花うぜいとあられなり。八九月をうりふ雨ふまじりてふきたる風いとあはき也。雨れあしよこさまふはこぐう吹たるふ夜とふしるわさぎぬのあせの香あどかきすゞしのひとくふひきうさねてきたるもをうしはすゞいだふいとあつかハ志うすてまふしうりうバいつのまよかう成ぬらんとあふもをうし何うつきかうしつま戸あどおあけさるふ嵐れさと吹わさりてかふ志みさることそいさドラをうしされ。九月つごもり十月一日の程の空うちくもりたるふ風のいたう吹ふ黄なる

野分ハ八九月頃ふく暴風といふ也

格子のつねハ格子のひとあつと坪といふもや次の初ふこまゆくと吹入とあるとも思ふべしこまぬのくもり

木の葉どものわろくところおれおつるいとあられ也。櫻の葉むくの葉あどこそおつれ。十月ばかりふ本立おわゆるおの危ハいとめでたし。野分の又の目こそいみドラ哀ふた不ゆれたてどとすいがいなどのふしなみさるよせんざいども心ぐるしげ也。おなきかふる本どもこふれ枝など吹をられさるごみきさふ。萩女郎花などのうへふよろなひとひふせる。いとおもをばなり。格子のつねなどみささときをことほらみ志さらんやうふこまゆくと吹入さることあらうりつる風の志とざともおなえね。いとこまぬの

たるハこき紅の上
のくろみたるをい
ふ也。

ねさめつとてハ一
本ねられさうつ
れハとあり。
久しうねおきたる
ハ朝寝しておきこ
るまゝのま也。
うちふくこみさる
ハ髪のをけさちさ
るをいふ也。

花もろつりぬれハ
標の色さめて雨よ
ぬまこる也。
うす色のとのぬ物

うハぐもりさるふくちをねおりの物うまねなどの
こうちき着てまここくきよげなる人のよる
ハ風のさこぎふ絲足つれた久志うねおきたる
まゝに鏡うち見てもやよりまここるざりせ
る髪ハ風ふ吹まふいされてすこしうちふくだ
みさるがかこふかこまこるをどまここふめで
たし物あいにれあるねしき入るをどに十七八を
うりよやあらんちひさうハあらねどわざとお
となどハ入えぬがすくし此ひとへのいみじ
うねころびさる花もろつりぬまなどしたるう
まいろのとのぬ物をきてかこまををなれやう

ハ薄紅のさるの着
もの也。

そきすそを髪す
そのそろへるをい
ふさけそりハそ
の長くて居長と
裾ふあまりとる也
ねこめハ草花のね
くるめ吹持れとる
をいふ也。
うすもハ童の後
手也。

物まゐるハ巾膝進
る也。
こしハ著也。
ひさけのえハ提柄

たるそぎすそもさけバウリハきぬのすそにそ
づれてそり波のみあざやうみてそバより入
るわらまのわりき人のねごめふ吹をられさ
るせんざいあどをとらあつめおこしたてあど
するをうらやまーげふおーはうまてつきそひ
たるうーろもをうー。
心あくき物 百六十段
物へどてきくハ女房とハおがえぬ怒の忍び
やうふきこえさるふここへ若やうふしてうち
そよめきてまゐるるハひ。物まゐる程もやま
しうひちなどのとりまぜてなりたるひさげのえ

也。さううーうい。ささりくくの音使也。

のふれふも耳こそとまされ。うちさるきぬのあざやうなるふ。はうがうのあらで。髪ありやらさたる。いミドら志つらひさる所の。おふとあぶらひまゐらで。おすびひふいとねわくおこしたる火の光ふ。ほれ帳のひとれいとつや。うふんえみものもかうのあげたる。これきをやうなるも。けざやうよん。ふくてうトさる火をけの。をひきよげよおこしたる火ふ。うきさる繪のんえさるをう。まのいとまひやうふすぢかひさるをう。あいつう更て。くれみあねぬのちよどのう。こもて。殿上人

このハ、鈎の也。簾をつりうくるもの也。

まのハ、火箸の也。

こいけハ、基石を基筋の意なり。

あぢ物いふふ。おくにご石けふいる音れあまの。聞えさる。いと心ふくし。まのこふ火ともしたる。おへごて。まくに。人の忍ふるが。夜中おどうちおどろきて。いふふハ。やえを男も忍びやり。ふうちわらひたるこそ。なまらあらんとをう。々々。

志まハ。 百六十一段

うき志ま やそし。たハ。さ島。みづ志ま。松が浦嶋 まがま此島。とよらの嶋。たどま。

たまハ 百六十二段

そとのとまふ。ふきあげの濱。なごいま。うち
での濱。もろよせのともま。千里のままこそひ
ろうおもひやらるれ。

浦ハ 百六十三段

をふのうち。志不がまのうち。志賀れうら。
なごうれ浦。こそまのうら。わうのうち。

寺ハ 百六十四段

つがさう。かさぎ。わうまん。高野ハ。こうが
う大師の志すくうなるが。あまをまなるなり。石
山。こうま。志賀。

経ハ 百六十五段

千手経ハ千手陀羅尼
尼經なるべし。

すいく経ハ隨求陀羅尼經也。

あまのの大すハ阿彌陀の大呪真言也。阿彌陀根本陀羅尼ともいへり。

せんすたらふハ即ち千手経の中ふあり。

文集ハ自樂天の文集なり。

申文ハ官をひみて除目をと小上る文といふ也。如きまハ大士の相好といふ取ち六臂身金色位況法お右

法華経を知らなり。千手経。ふがん十願。す

いぐ経。尊勝ごらふ。阿みごの大ず。せんす

ごらふ。文を 百六十六段

文集。文選。ちうせの申文。佛を 百六十七段

如きまハ人の心をお不しわつらひてつらづえ
をつきておハせる。せよ志らむあハきふをづり

く。千手すべて六観音。不動尊。薬師佛。志や
り。みろく。普賢。地藏。文殊。

物ごたりを 百六十八段

第一思惟第二持室
珠第三持念珠左第
一按光明山第二持
蓮花第三持輪とあ
る第一の思惟の手
ハ念會有情故と有
とかくいへるなり
住吉りつ不ハ今の
世みつよまれとも
殿うつり以トの物
語ハ存見なりし。

そらけのハ何れの
國とも忘れりし
まつけたるハいつ
てさやうふハ名付
けんととのさ也。

住吉。りつ不のるゐ。殿うつり。月まつ女。
かこの、少将。梅壺の少将。人め。國ゆづ
り。うもよ木。乃心まゝむる松が枝。こまの
物語ハふるきかをりはく出てもいしうを
りしきたなり。

野ハ 百六十九段

嵯峨野さらかり。いなび野。かよ野。こま野。
あはづ野。飛火野。志めし野。そらけ野
こそまをろふをうしけれなどさつねさるより
あらん。あべ野。みやき野。かまら野。むら
さき野。

陀羅尼ハ曉ハあり
つきふよむがころ
しとのさるべし。

あそびハ音楽とい
ひ又よろづの遊伎
をもいふなり
さまあしれどら
蹴鞠のさまなるべ
し。

するらまひハ東遊
をいふ也
もとめこの求子也。

陀羅尼ハ 百七十段

あかつき。 百七十一段
どきやうハ 百七十一段
タぐれ。
あそびを 百七十二段
ふる。人のか不又えぬるど。あそびわざハはまあ
しけれども。まりもをうし。こゆみ。おんふと
ぎ。基。

まひを 百七十三段

するらまひ。もとめこ。よいはいらくハ。さま
あしけれどいとをうし。太刀なごうたてくあれ

うたさふくしてハ
漢高祖楚項羽と鴻
門不會せし時項羽
のまひしを太平の
曲といへし其折の
さまをかきいへる
なるべし。

もとハ技頭也。
らくそんハ落躡也。
納蘇利ともいふ。
こまりハ右方と
いふなるべし一本
ハ狗杵ともあり。
さうのことハ十三
弦といふ也。

ふかうてう云々ハ
風香調黄鐘調菴香
急春宮睡想天憐也。

どいとおもしちしどろろにうさきふくして
何そびなんたどきくら。 ちれまひ。 なとうハ
かいらのりみふりうけたるまみあどハおそろ
しれどがくもいとおもしちし。 らくそんを
二人志てひざふてまひする。 こまぎら
引ものも 百七十四段
琵琶。 はうのこと。

志らべも 百七十五段

ふりうでり。 わう志きでり。 そかうのきうう
ぐひを此さへづりといふ志らべ。 さうふれん

笛ハ 百七十六段

何とも見えすハ目
ふくぬき也。

あつつきかとふ云
々ハ忍びてきたる
男かとの忘れおき
たるなり。

さうのふえハ筥也。

ふこぶえいこどりをう。 遠うよりきこゆるが
やうくちううなうゆくもをう。 ちうくまはる
が。 なるうななりて。 いとわのうふきこゆるもい
とをう。 車ふても。 かちあても。 みるも。 すべて
ふところふさ。 いれても。 なるも。 何とも見えず。
さばうりをう。 き拍をあし。 まうてき。 ちうりた
るてう。 なるどい。 ちうめ。 せう。 ありつきなど
ふ。 忘れて。 枕の。 もと。 ありたるを。 見つけたるも
な。 なきう。 人の。 もと。 ありさ。 り。 おこ。 せたるを。
お。 つ。 み。 て。 や。 る。 も。 ぶ。 文。 の。 や。 ら。 ぶ。 見え。 たり。
はうのふえハ。 月の。 あり。 き。 ぶ。 車。 た。 ども。 て。 せ。

アんの祭ハ、聖茂の臨時祭也。

うるはしき髪云々ハ、笛をおもしく吹くはと、小華葉の吹出ぬまの舞さめ

たる。いとどうをうし。おせくもてあつらひみくくぞえゆる。ふく顔やいろふぞ。おれはふこ。笛もふきなりありうし。ひちりきハ。いとむつらう。秋の虫をいとむくつとむし。なごふ似て。うてけぢうくきうまやうらげま。てわろうふきたる。いとむくきみ。アんのまつりの目。いまごおまへふ出をて。物のうらうらよて。よこぶえをいとどう吹てたる。あな。おもくるときく。やどみ。なうら。ばりう。うら。そへてふきのがせ。さる。あどこそ。さ。いみ。ど。う。う。る。ハ。きかみもたらん。人とみ。ふ。た。ち。あ。ぐ。り。ぬ。べ。ま。は。い

て身の毛もよこつとのま也。

清賀茂後ハ、関白参詣。卯月申日。よて。必。賀。茂。祭。の。前。日。ホ。あ。る。也。

えうしたるの。登したる也。半臂の赤紐の白く。なう。たる。と。い。わ。か。り。氷。う。と。云。ハ。打。目。の。つ。や。め。ま。し。を。い。

ちどむる。やうく。琴。笛。あ。ハ。せ。て。あ。も。と。出。た。る。い。と。ど。う。を。う。し。

見えるもの 百七十七段

行幸。まつりのかへさ。清賀茂。ま。う。で。アんの。の。まつり。そ。ら。く。と。り。て。さ。む。げ。な。る。ふ。ゆ。ま。ま。こ。う。ち。ち。り。て。か。ざ。し。は。花。あ。を。ず。り。た。ど。お。か。り。た。る。え。も。い。を。む。を。う。し。た。ち。の。さ。や。の。ま。い。や。う。あ。く。ろ。う。ま。ご。ら。よ。て。あ。ろ。く。ひ。ろ。う。え。え。た。る。ふ。も。ん。ひ。の。を。の。え。う。志。さ。る。や。う。み。か。ア。ま。た。る。ぢ。ず。り。バ。う。ま。の。中。よ。り。こ。あ。り。う。と。お。ど。ろ。く。わ。り。た。る。う。ち。め。な。ど。す。べ。て。い。と。め。で。た。し。

ふ也。
菘の花のうさしをいふ也。

かもの社の夕襟の
古今集ふ早振賀
菘の社木綿襟ひと
ひも君をうけぬ日
いふ也。

かみくさうの神々
いふ也。

今すこゝおやくわらせまやきふ使ハ必ふ
くげなるもあるたびハめもとまらぬされど菘
の花あうくさしたるあどのをうさう。終るぬる
りたをえおくるらるゝふべいさうの志をおく
れたる。柳の志さねふかざし。の山吹おもふ
く。尺ゆきども扇いとたりくうちたらし。か
の社のゆふどまきとらひとるハいとをうし。
ゆきにおむらふるものハ何うあらん。昔こゝ
ふとてまつりたるを見まらせたるハ。あけく
れ清あふさぶらひつううまつるもおがえむ。
かみくさういつくしう。つねハ何ともたまきつう

ひめまうちきみハ
東照子也。
みつなのすけハ風
輦の御綱を奉行す
る大舎人助といふ
なる也。

うちなえてハ打茶
みて也。

さひめまうちきみさへぞやんごとたうめづら
しうおがゆるみつなのすけ。中少将あどいとを
か。まつりのうへさいこらうをう。きのふ
なよろづのうらるこしうて。一条の大路のひろ
うきふらなるふ。目のうげとあつく。車ふさし
りたるもまたゆけき。扇ふてかく。ゝ。ななり
あどして。久志うまちつるも。んぐる。うあせな
ども。何えしをけふ。いととくをて。雲林院ち
そく。るんた。どのもとふ。よとる車。ごも。葵。うづら
もうちなえて。尺。ゆ。日。ハ。出。されど。室。ハ。登。う。ち。く
もりたるふ。い。う。で。き。う。んと。同。を。さ。ま。う。お。き。る

あまのさへあるふ
やとの糸ふハ稀ふ
るふのさ也。

かれふ似せんハ郭
公の聲ふ似せん
のさ也。

まぶむごハ未冬期
ふていつともなし
とのさ也。

たじハ腰輿也。
これふ奉りてハ齋院
これふ乗りてお
すらんのさ也。

たるうげふハ冬期
ふ久しといひたる

てまゝなる、郭公のあまのさへあるふやときこ
ゆるまでなきひづりせたいみどらうめでたしと
おもふほどふ嘗の老たる聲ふて、彼ふ似せんと
おぼしくうちそへたるこそ、みくづれごまを
うし、いつしうとまつ、又、此社のりたよりありき
きぬあどきたるものどもあどつれごちてくる
をいうふぞ、ことなりぬやなどいへば、あまむご
などいらへて、清こしごしなどもてりへるこ
れふ奉りておをしませらんもめでさくけぢり
くいうではるげまなごのさぶらふふりとれそ
ろし、えるうげふいふほどもあかくかへらせぬふ

程もなぐのさ也。
青朽糸ともハ、出車
の女房の出たらな
となるべし。

富院のゑんがハ、
院の饗の垣下ふ奉
るなるべし。垣下と
ハ、大饗とよも、
数の外の人の交り
たるを垣下の君達
といふ也。

あふひよりをよめて、青くちをどもものいとをう
しくゆるふ、おの衆のあをいろあらがさねを、
けしきをうり引りけさるハ、卯花垣根ちううお
がゆるし、きのふハ車ひとつふあまのこのりて、二
あるのなほ、あるハ、狩衣など乱まきて、簾取お
ろし、抱ぐるほし、きまでええし、君達の、齋院のゑ
んがふて、ひのさうぞくうるハ、くいて、なふハ、一
人づつ、をさく、ちく、あたるありふ、殿ふわらもの
せたるもをうし、わさりをてぬるのちふハ、など
うはし、もまどふらん、我もくとあやふくおそろ
し、きまで、あふん、んといそぐをかうないそ

やり色しての我車
をやりこして也

かつらなどのハギ
の小葵ふそへし獲

ぎそのどやうみやまと扇をさし出てせいすれ
どきもいれねばわりあくてすこひろきお
ふ志ひてとめさせてたちたるを心もとあ
よくしとぞとひさるまほひかゝる車どもを
やりてあるこそをうられすこふろき不
どみやま色してたの山里めきあハきたるふ
つ木垣ねといふおれいとあらく志うおどろ
しげふはし出る枝どもなどおるるふ花ハ
まごふくもひらけをそむつ不みぐちみえゆる
ををらせて車のこたうかあさあどふはしたる
もかつらなどの志がみたるう口をききふをり

の志がみたるふ今
卯の花の物きり
とうーとのま也

こねふじりるハ
古今集上風ふけハ
峯上別る白雲の
とえてつれなき君
う心うとある歌也
うへハつれあハ
拾遺集上芦根もふ
うきハ上こそつれ
なれ下ハえなら
す思ふ心とある
歌をとれるなり

しうねがゆとほき不どハえもとあるまどう
ゆる好さきをちううゆきもてゆけハはしもあ
らざりつるこそをうけれをここ此車の雅と
も志らぬが志りふひきつゞきてくるもたが
るよりハをりしと見るやどふひきわりる所
よてこねまわりるといひさるもをりし

夏の山里 百七十八段

五月をりり山里ふあまくいみづくをりし澤水
もげふさざいとちをくええわさるまうへハつ
れあく草おひ志がりたるをなうくとさざま
ふゆけハ志さハえあらざりける水のふりうハ

輪のまひたらたる
 云々ハ一本まひ
 たりけるよおきあ
 かりてふとりへ
 たる香とあり。
 ちりふりへたる
 ハ蓬の香の間近く
 匂ひたるをいふ
 いふへきよもあら
 すハ先おとする不
 との人の車なれば
 優なるすいひよも
 更なりこのま也。

あらねど人のあゆむつたてとを志りあげた
 るいとをうし。左右に有る垣の枝などのかゝり
 て車のやうたふいるもいそぎてとらへてとら
 んと忍ぶふふとをづれてるぬるもくちをいふ
 もぎの車よおしひーがきたるが。輪のまひたら
 たるよちりうりへたる香もいとをうし。

夕まぐみ 百七十九段

いんどろあつきは夕涼みといふなどの物れさ
 まあどねがめりきよ。男車のさきおふいひ
 べきりよもあらばさぶの人も志りのすどれあ
 げてふりもひとりものまてをいせていく

ありりいハ靴也。
 吳りうりきあらぬ
 ハ靴の香なれハ也

松の煙ハ炬火の煙
 也。

其折の云々一本よ
 香の香の同

こそいと涼しげあまきまて琵琶ひきあらう。笛
 のねきこゆるをさていぬるも口をくさやう
 なるあどふ半の志りがい香れあや志りうぎ
 たらぬさまあれどうちかぎきたるがをうき
 こそ抱ぐるほしけれいとくらやみあるよさき
 よともいたる松の煙れ香の車よかされるもい
 とをうし。

五日の菖蒲 百八十段

五日のさうぶれ秋冬をさるまであるがいみどろ
 志ろみうれてあやきをひきをとりあけたるふ
 其折の香残りてかへとるもいみどろをうし。

やうよりいれさる
もいみじきとく
とあり。

今のよりハ今焼き
しよりのま也。

名くろハ鷹の餌
囊也。
かたまりハ金椀也。

たき物 百八十一段

よくきあめたるよき物れきのよきととひけ
ふあどいうち忘れたるよきぬを引りづきたる
中ふ煙のぬこりたるいまれよりもめでこし。

月ありき敷 百八十二段

月のいとありきよ川をよこせよバ牛のあゆむま
まよするーやうなどのわきさるやうに水のち
りさるこそをうーられ。

ねりきよてよき物 百八十三段

法師 くだ物。家。ゑぶくろ。すゞ玉の墨。
をのこれ目あまりねりきハ女めきたり。又りち

は、つきハ酸漿也。

まりのやうならんハおそろし。火桶。ほづ

き。松の本。山ぶきの花びら。るもろしもよ

きハおねきよこそあめき。

みどろくてあまねべき物 百八十四段

ととの物ぬふ系。とうどい。げま女の髪うる

をしくみどろくてあまねべきし。人のむきめの

こゑ。

人のいへふつきぐ志き物 百八十五段

くりや。侍ひのばうし。をき此あさら志き。

かけむん。童女。をした物。ついたてはり

ト。三尺のきちやう。志やうぞくよく志さる

侍の曹司ハ侍の部
屋也。
うけむんハ懸盤
て貴人の膳ももち
あるもの也。

中のせんさうけ盤
の次たるをいふ也
ひぢきりたるらう
ハ臂折廊也濱良云
臂折らうハ文集の
折臂翁にてらうハ
老人のことみて即
翁の字ふあてい
ふハ折臂翁の繪を
かきたる火桶とら
けて見るべきなる
廊よそハひぢきり
とあり
ちくさうるハ万歳
本ハ或ハ竹王繪と
あり作り繪とあり
と書ひりめたる
みやとあり
なえとみたるハ着
かれてなふしく

急ぶくろ。 かわらりさ。 かき板。 とあづー。 ひ
さげ。 てうし。 中の盤。 わらふど。 ひぢきり
たるらう。 ちくわり急うきたる火をけ。
清げなるをのこ童。 百八十六段
物へいくたふきよげなるをのこれ。さて文の不
そやうあるもちていそぎゆくこそいづちあら
んとおぢゆれまきよげたるわらハべあどの。
あこめいとちぎやうふハあらむあえをみとる。
けい一のつやうなるが。かそにつちおろくつ
いたるをまきて。志ろきりふつ。みたる物も
ハハこのふ。草紙どもあどいれてもてゆ

見ゆるをいふ
けいしハ寝子ふて
草付のそき物也。
つらふらん人ハ其
後者の主人をいふ

くこそいみどらうふびよせて見まをくたれ門ぢ
りなるふをわさるをよびいる。ハあいぎやう
あくいらへもせでいくものをもつらふらん人こ
そおハはうらるま。

行幸 百八十七段

車かとのなきぞい
行幸ハ公卿以下
徒歩あて供奉まれ
ハさひとのま也

好幸ハめでとき物。まき給君ごち車たどのなき
ぞすこハはうくまき。
わびーげなる車。 百八十八段

洗経をといハ洗経
聴聞の車をといハ後
世のよめさまて風
流ハ華嚴ならても

ふろづのふりも。わびーげなる車ハはうぞく
わろくて物見る人ハともどらう。洗経あどハい
とふ。つみう。あふうこのふあれば。それどふ

よきとそれよの
さなり

何ふなと人ふ
劣るさまを何
し物見み出たる
そのこと也。
さて見るらん見
苦しくて見ると
也。
るなりハ車の簾を
居張る也。濱居云る

程あふちなるさまふて見ぐるしうるべきを
ましと祭などをもてあまねげし下すどもあ
くてあらしきひとへうちされなごしてあめりう
したぐ生目のまうふとて車も下すどもあ
てしといとくちをしうをあらじと出さるどもま
さる車などにつけてハ何れふなど見る物をま
しといわがりなる心地みてさて見るらんお
りの不りあましく君どちの車のおしわけてちう
うこつ時など心とききめきいすまよきおよして
んと急がせむとく出てまらぬといと久きみ
るなりたちあがりなごあつくくるしくまちこ

なりハ居らひこり
のさならん居張
るといふやいら
七つ八つ云くハ車
の打續きて来る也

するらんハ水飯ふ
て傷つけるとやう
の物なり。

馬の口なるしハ
馬の口をとる也。

まこれもある限の
一本なりえともあ
る限とあり。藤袴何
れふもとりにおろす

うずるやどふ。齋院の急んぐふまるりたる殿上
人ふの衆辨少納言など七つやつ引つ付けてる
んのうたよりをしらせてくることなりふ
かりとおどろりもてうれしけれ殿上人の抱い
ひおとせおくの清きどもにするをんくをま
てはどききれもとふるひきよまるふおやえある
人の子どもなどをばうまきなどおまてるのく
ちなごしてをらしはらぬもの、足といれらき
ぬなどぞいとほしげなる清くしのわたらせぬ
へバすどももある限とりれるし。ささせぬ
るふまどひ何ぐるもをらし。ままへふたてる車

い致礼の後あるべ
いひまらひひてい
下人を制しうねて
主人は消息しそこ
とまる也。

ひとたまひハ副車
をいふ出車ともい
ふ公方より点せら
れて其人ハ給ふ故
其人給と名付くる也
不ある方ハ見物ま
べき所のある方の
を也。
ひなびあやしくハ
車の主人の志めや

をいみどろうせいもあるふなどてたつまどきぞと
志ひてよつれバいひわづらひてせうそこなど
するこそをうしくれ石もたぐとちかさなりた
るふよき石の車人だまひむきつぎきておろく
くるをいづくふたんとえるふどふ清あども
只おりふおりてよてる車どもをよりのけみの
けさせて人あひつぎきてたてるこそいとめで
たぐれおひのけられたるえせぐるまどもうし
うけてふあるうさふゆるぐらもてゆくなどい
とどびげなりきらく志きたまをバえさしも
おひひらぐぞかといときよげあれど又ひなび

うならぬさま也

不そとのみ云ハ
清少納言の廊の局
み忍ひてとまりし
人雨ふる曉不帰り
しとして人々沙汰せ
えたるを也。
地下ハ昇殿せざる
人をいふ也。

大りさハ登ふて笠
の柄のあるをいふ
あり
みりさ山ハ后官の
は連歌不て彼ま

あやまぐげをもええずよびよせちご出しも
などするもあるぞうし。

大がさ

百八十九段

細殿不便なき人なん曉ふ笠させて出けると
言出たるをよく聞けば我ふ也けり地下などい
ひてもめやましく人よ許さぬをうりの人みもあ
らざめるをあやしのみやとあふれどふうへよ
りは文もてきて返り只今とたせられさり何
りようと思ひて思ふバ大がされうたをかきて
人ハいんむ只みれうぎり笠をとらへさせて下ふ
みりさ山やまをあらし何したより

させて出たる勢よりさまくの沙汰ある事を仰せられしなるべし。

雨あらぬ名の清少納言の付向也。うる浮名の世よふりて后宮ふまてまられ奉らせし恥しさよとのさたるべし。

とかせぬつりなほそりたまきうみてもめでた
くのと拍がえさせぬふもづうく心づきた
かきういいうでゆらんぜらきと相もふふさ
るそらごとなどの出くるこそくるしわれとを
ううてこと紙不雨をいふうふらせて志も
ふ。

雨ならぬ名のふりふけるうか
さてやぬまきぬふの侍らんとけいとなれば右
近内侍などふかさらせぬひてわらせよまひ
なり。

あまぎざし

百九十段

さうふのくしの菅蒲輿禁中へ奉ると
后宮へもまゐらせ
たるなるべし。

まぎざしの菓子なり
麦の未熟するを煎
りて後皮とさりそ
と白ふひきて調す
るものなり。
ませこしの麦とい
ふ意也万葉集ふま
せこしふ麦をむ駒
のいらるれと猶も
恋しく思ひうてぬ
まとおまひなり又
万歳抄云あまぎざ
し野庭なるものか
れハ唯ませこしよ

三条の宮におをしまを比五日のさうぶれこ
あどもちてまありくもむまるらむなごわうき
人くみくしげどのなごくもむして姫やわう
宮つけさせまといとをうきまむふりよりも
まゐらきたるふあまぎざしといふもの人のも
てきたるとまきうすやうを艶ふるすまれふ
たふ志きてこれませごしふさぶらへばとてま
ゐらせたれば。

皆人の花やてふやといそぐ目もわがこころ
とバ君ぞ志りたる。

と紙のこしを引やまてうせぬるものいとめ

帝覽せたまはる迄も
奉るとのさ也今
世も貴人小物奉る
の事目も觸るなど
いへるも同じあり
さふらへば濱居云
さふらへどとてと
ありなし
皆人の云々の人々
の茶をよして色々
細工といそく端午
の日も清少納言の
我心をちりて多刺
と進せしは満足也
と戯れ給へるなり
髪をういこしてハ
髪を音のふより
前へ打こしてさふ
とりたる也
あつらひききとい
みいとくもハ一
本ふあつらひきき

でたし
ゆげひのすけ 百九十一段
十月十餘日の月いとありきふありきて物見ん
とて女房十五人むりり皆こきねぬをうへよ
きて引りくつゝあし中に中納言の君の御の
張たるをきてくびより髪をかいかしあつりし
うばあつらひききそとバふいとよくもふとまじし
ゆげひのすけとぞわうき人ぐいつけたりし
りふたちてわらふもあつらひきき
如位此中 百九十二段
成信の中將こそ人の聲はいきどうようぞ志り

とてよくもとあり
濱居云一本ふてよ
く閑えこりさてよ
くも似たりしりあ
ハ下のゆげひのす
けといふへりけれ
り上文ふけなきも
のゆげひのすけの
やかうとあり西宮
記ふあつらひきき
とあり月夜ふけい
こせる髪の靱負佐
の夜行の姿も似通
へるといへりかい
こせる髪の靱の形
見ある也
彼君さち給ひなん
ふとい大藏卿立給
ひたらも語らんと
再活せし也

あひしうおなごの人の聲なきどい常ふきうぬ
人の更ふえきわらむことう男ハ人のこ急を
も手をも見わきす分ぬ物といみどうみそらな
るもかこころきわきあひこそ
大藏卿 百九十三段
大藏卿をうりみとき人あ御ふ蚊の睫まげのお
つる不どもす付あひつづくこそあし職の清
ざうの西おもてふ位比大殿の四位少將と
物いふふそをにあら人比少將ふ扇の急れりい
へとちいめければ今彼君さちあひなんふをこみ
そらふいひいるとそ人どふえきつけで何

そんよハ彼扇の
すいひし人をいふ
をさうちてハ犬を
御のきつつけ給ひ
て也

らう多きハ勞多き
みて久くつうと
れ一也
さし今ハ今ハ墨
をさみてつうと
いふ也
おきくちのたまめ
ハ濱尾云今いふ
つうけふて硯箱の
うしの上の方の
さまハ塵のあると
いふ也

とくくとをかぶくるよ手をうちてふく
しきのあはらふまこととのあふこそい
ですあひつらんとあさよしりり

硯 百九十四段

硯きたあげふ塵を墨のうまつりたふあどけ
なくすまひらめうらうおなきふあたるがは
さしなどしたるこそ心もかしく覺ゆまの
てうどのさるおきて女ハ鏡硯こそ心のほごえ
ゆるなめれおきぐちのをざめよ塵るなど打捨
たる様こふなうし男ハましてふづく急きよ
げふおーのごひて重ねならずばふこつうけこ

重ねハ重硯也

とあれと云ハ硯
なとよめてもあ
くても物うけハ同
しうとのま也
くろむこのハ蔭繪
もなく唯黒塗の箱
をいふ也

あをトのうめハま
磁の水入の龜の形
なるをいふ

の硯のつとつまぐちうまき急のさまもよざと
ならねどをうりうて墨筆れさまなども人のめ
とむべうりあてたるこそをうりなれとあれ
どか、れどおなごうとてくろむをこれあもか
たーおちたる硯わづらふすみのおるちりの
はせふハたらひぐさげなるふ水うちながして
あをトのうめれ口おちてくびのかぎりああれ
程とえて人よるまきなどもつれなく人のあふは
し出づうし人の硯を引よせてま習ひをも文を
もかくふ其字なつらひあひそといをれたらん
こそいとわびうるべかれうちおらんも人わ

さ覚ゆるも志りた
れいもさやうも速
惑なるも思ひあり
たれ人の我事と
つりふをもいと
見るふとのさ也
水うちふの濱居云
墨と多くふくませ
たることをいふ也
こいものや座りい
あとなし身をめた
と書付たるさまに
や万歳抄云こもも
のややうとうかま
ほそひつのふさあ
とふよてこれハ物
や遺戸リ何やほそ
ひつのふさなど云
云の意なりとあれ
と終たしうあらば
さいもんやそハ筆
を要くつうひなげ

ろし程つうふもあやふく也。さ覚る事も志りと
まバ人のまもるもいとで見るふ。身などよくとあ
らぬ人の。情すがお物り、まをうするハいと
よくつうひかこめたる筆とあや一のやうみあ
がちみさしぬらし。こいものや座りとかなに
ふそびつのふさなどにうきちらし。よこさま
みなげおきたれ。バあふかしらハさし。いれてふ
せるもふくきさぞうし。されど情いもんやそ。
あうより給へ 百九十五段
人のまへみるさるふ。あふくらあうより。さまへ
といひたるこそ又わび。ハれさし。のぞきたる

とてなつうひそと
もつふへき事あら
ぬハと也。
あうより給へハ奥
へより給へのさ也
いこれたるも人
の見付て驚きて咎
めたるう。悦し。の
さ也。さるハつねの
人の上なり。思ふ人
おとらめられたる
折ふハあらずと也
なるうなる世界ハ
速方の國の意也。
あしこい。彼處の意
也。

をのそきたるも思ふ人の事。よとあらばかし
文といふもの 百九十六段
めづらしういふべき事。ふハあらねど。文こそ程
えでたき。扱なれ。なるうなるせうい。み阿人の
いとトく。おが。つうな。く。いうならん。とおもふ。ふ
文とみ。色を。只今さし。む。う。ひ。たる。やう。ふ。お。不。ゆ
る。いと。ト。き。さ。なり。う。我。あ。ふ。さ。を。云。や。り。つ。も
バ。あ。し。こ。ま。で。も。好。つ。う。ぎ。る。ら。め。ど。く。ろ。ゆ。く
心。ち。こ。そ。す。れ。文。と。い。ふ。扱。な。う。ら。ま。し。う。バ。い。う
ふ。い。ぶ。せ。く。く。れ。あ。さ。が。る。心。ち。せ。ま。し。う。ろ。づ。の
み。ら。み。く。て。そ。人。の。と。と。へ。と。て。こ。も。ぐ。と。う。ま。て

おきつれをおどつりあさともあぐさむこち
まゐるふまゝして返りつれば命をのぶべうめる。
がふことよりみや。

うまやハ

百九十七段

なしたら。ひぐれのうまや。もち月のうまや。
れぐちのうまや。山のうまや。あはれなる
子をきくおきたりしよ。又あはれなる子のあ
りしかど。猶とりあつめて何はれうおどゆ
るなり。

岡ハ

百九十八段

ふふと。かごと。ともとらハ。の拍ひ

けふこころみや
ハ文をめてとき物
といふハ理也との
意なり。
うまやハ駅ふて今
の馬次宿々也。

新岡ハさハのハ神
樂歌ハ此筈ハいつ

このさハそとぬり
らちこハふさりれ
るともをりの筈と
あるといへる也。

たるがをうき也。かごらひれをう。人見の
をう。

やーろハ

百九十九段

ふるのやーろ。いくたの社。よつたれやーろ。
そふちのやーろ。みくりのやーろ。すぎ
の社。志るー。あらんとをう。ことのまゝれ
明神。いとたのも。けのまき。なんとやいそれ
あハんとおもふぞいとをうき。あまどほ
の明神貫之がるれわづらひけるふは明神のや
ませあふと。歌よみてままらんふ。やちあひけ
んいとをう。はありどおしとつけたる心ハ。御

すぎの社ハ三輪
をうよやまろ
の杉といへる下の
洞思ふべし。
いとこのハハ社
の名ハそのま
お願かなふべきや
うなれハなるべし。
ねまると云ハ古
今集ふねきことを
さのみきハけん社
こそそハ歎の森
とをうなるめとある
といふ也。

せいあるふい制ふて法度也。けうあるハ孝行なる也。

ふやあらんむうー招ハーまーける帝の只若き人とのみおぢーめして。四十ふ知ぬるをばうーなをせあひつれば。人の國此とほきあいきかくれあどして。更ふ勢のうちみ物なうりけるふ。中物なりける人のいみどき時の人ふて。心なども賢うりけるが。せそぢちうき親ふこりをもたりけるが。かう四十とぶふせいあるふ。まーていとねそろーとおぢはこぐをいみどうけうある人ふて。となきふ又ハ更ふまませど。一日ふ一度見でハえあるまどとて。みそろよよるく家の内れとをりて。せうちみ屋をたて。それふこめ

かとしてう云い。なとてうさまて制し給ふらん老人の出つうへんとこときらひ給ふめ。家内ふ居らんハあらてもおおせよーとの表也。

息て。いきつゝ見る。おぢやけふも人よもうせりくれたるよしをあらせてあり。なまどてう。家ふ入給たらん人をバーらでもおハせか。うたてあまなる世ふこそ。おやハ上達部をどよやまらん。中物あど子もてもたりせん。いと心りーこく業のうまりたりなれば。ハ中物日々色どぎえあまい。り賢く志て。時の人ふおぢま也。たりもろこーの帝。これ國のみうどをいうで。をうりて。ハ國うちとらんとして。常ふ心足あらがひ子を志て。おくりあひたるふ。つやくとまろふうつくしげふ。あづりさる本の二尺ばかりあるを。これが

時の人ふおぢすハ。帝の心も此中將を當時の賢良とおおしたりとの意也。

すべてあるべきや
うなしい此國人何
れも着て分別あ
かりし故なるべし

只そやうらん川ふ
ハ老父の教ふる何
なり

もと来いづうたぞととひ奉たるふすべてある
べきやうなれば帝おがしめしわづらひさる
ふいとほしくておやのもとふゆきてかうくの
みなんあるといへば只そやうらん川ふさちあ
がらよこざまふあげ入んふかへりてあがれ
むいたとす急と志るしつういせとをふま
るりて我志りがふしして心又侍らんとそ人々
ぐしてなげいれたるふはきふして好めさふ志
るしをつけてつういしなればまことふはあり
なり又二尺むりりなるくちたふハのおたさしやう
なるを是いづれう男女として奉れり又はらふ

二つをならへてハ
亦老父の教ふる何
也

をえたらうさんハ
尾を動さんとなり

七已ハ七曲也穴
のまうりとわりし
なり

人え志らむれいの中物ゆきてとへば二つをな
らべて尾のうたふそきむいえをゆしよせん
ふをえたらうさんをめしよといひけむがや
がてそれを肉裏のうちまでさしなればまこと
ふ一つをうごうささず一つをうごうしけるふ又
あるしつけてつういしなり程久しうてせわど
ふにどりまりたる玉の中とほりてたふふ口あ
きたるがちひはきを奉りてこれふをよほして
たまいらんは國ふみあ志侍るふなりとして奉り
さるふいみどりらん物の上ふふようならんそ
こらのこと遠近よりをよめてありとある人志ら

おなまきたる蟻をい
亦老父の例也

ころをぬりてい蜜
をぬりて其香をま
るへ小蠟のゆくへ
きうため也

さるまゆい心みる
みせせたりしと也

べといふふ。又いきてかくなんといへば。おなま
きたるありを二つとらへて。こゝみやそき系をつ
け。又それふ今まこゝふときをつらて。あなたこの
口ふみつをぬりて。んよといひなれば。さ申て。あ
まをいまこりけるみんめんの香をかぎて。まこと
ふいとどうちあれあなたのかちみ出ふなり。は
てそ糸のつらぬれさるをつらひたりける
扱ふなん。終日本ハうこかりなりとて。のちく
ハさるまゆもせざりなり。は申指をいミドき人ふ
おなめして。何みをし。いうなるくらゐをう給
なるごきとおなせられれば。さらふつりさ位

老たる父母のハ唯
申指の我父母のみ
をいふあらすま
べて世人の父母を
ゆるされんやとい
へるなるべし。

をも給をらじ。只老たる父母のかくれうせて傳
るをさづねて。おなままをゆるさせぬつ
と申されば。いミドうやまきみとてゆるされふ
なれば。よろづの人のおやをまきとてよろこぶ
るいミドうりなり。申指ハ大臣までみなさせ給
ひてなんありける。さて世人の神ふたりたるふ
やあらん。は申指のもとくまうでたりなる人ふ
よるちらハれてのさまひける。
なまわさふまがれる玉のを。ぬきてありと
ほしともあらむやあるらん
とのあひなると人のうたりし。

ひそごぶきいとめ
てたしハ檜皮葺ふ
ふりたるうおもし
ろしとの意也
かたらのめことハ
丸瓦の間くをいふ
なり。

うすきえみハ薄く
黄みたる色の也。

ふるものハ 二百段

雪。あらは。みぞれハみくぐれど。雪れよあら
ふてまじりたるをうし。雪ハ。ひをぶきいと
めでたし。すこしきえぐとふたりたる。又い
とおやうハあらぬが。かいらのめぐとふ入てく
ろうまし。ろみええたるいとをうし。あぐれ
あられハいとや。霜も板屋。庭。

日ハ 二百一段

入目。いりえてぬる山ぎハ。ふひりの狩とまりて
あううえゆる。ふうまき。バみたる雲れ。あびき
たる。いとあハ。はなり。

月ハ 二百三段

あけ。東北のちふ。不そうて出る程衰也

星ハ 二百四段

すばる。ひこがし。みやう。おやう。夕つ。
ふバ。ひがし。とぶみ。あうら。ま。う。ま。う。て。

雲ハ 二百五段

あろき。むらさき。くろきもをうし。風吹打
のあま雲。明をふる。あどのくろき雲の。やう
く。あろう。なり。ゆくもいとをうし。あふさる色
とらや。あまもつくりなり。月のいとあろき
あふ。あま雲いと衰也。

すはるハ。昴星也。
みやう。やうハ。明
星也。和名抄ハ
あかほしとけり。
夕つハ。長庚也。
大白星の一名也。
ふてひやしハ。流星
也。星ももうる名
とさへつりすハと
とさふれたる也。
くろきもをうしハ。
一本。あま雲也
とあり。

標註枕草紙讀本卷四終

